著：スズム
主犯：150P
イラスト：さいね／こみね
終焉ノ栞
参
終末 -Re:write-
MF文庫J

終焉ノ栞
シュウエン シオリ
参
サン
終末 -Re:write-

Ano
Bka
Cna
Dsuke
Eki

B

D

終シユウ焉エン ノ栞シオリ 参サン

終末-Re:write-

スズム

Contents

CHAPTER 1
始まりのページは。

世界から音が消えたかのような錯覚。

記憶は曖あい昧まいだが、覚えているシーンは明確すぎるほどに覚えている。

フラッシュバックのように、断片的に。

——まるで、オモチャみたいだ。

最初の感想はそういうものだった。

それはまだ、現実を受け入れられていなかったから。

いや、ただ単に、現象を理解出来ていなかったからかもしれない。

初めて見た人間の死体。

死体や意識を失った人間は、ただの物のようになるというのは知識としては知っていた。

でも、実際にはそんな生易しいものでは無かった。

精密に出来た蝋ろう人にん形ぎようのような不気味さを感じる。

あるいは、その死体の状態が異常だったせいかもしれない。

「……嘘うそ……だろ……？」

最初は手首が落ちていた。

断片はグロテスクで真っ赤に血が滴したたっていたのだが、血が抜けているからなのか指先に向けて陶とう磁じのように青白かった。

そのせいか、オレはなぜかオモチャのようだと感じ、次に手袋のようだと感じた。

我ながら間抜けな感想だとは思うが、本当にそう感じたのだから仕方がない。

そして、非現実的な断片はさらに加速する。

次に目に飛び込んで来たのは、人間の下半身のバラバラな死体。

足から膝ひざまでと、膝から太ももの付け根まで。

片足ずつを２つに解体したもの。

足から膝までは見てすぐに脚だと分かったのだが、太ももの部分についてはそれのみを切り出すと、一瞬それが何なのか理解することが出来なかった。

両方の脚はご丁寧に制服のズボンや靴を履いたまま、バラバラにされていた。

それから先は──……

CHAPTER2
鳴り響くベルが告げる。

「……！」

　勢い良く起き上がり、慌てて手のひらで頭を触る。

　ヌルッとした嫌な感覚が手に伝わり一瞬驚いたが、手を離して見てみると、それは透明な液体だった。

「……夢……か……？」

　やけにリアリティのある夢だった。

　繰り返し何度も何度も見た夢のように、細部まで再現されたような情報量。

　まるで匂においも、湿度も保存されているかのよう。

　体中にかいている汗のせいで服が張り付いて気持ちが悪い。

　先ほど指の先についた透明な液体は、自分の汗だったようだ。

　念のため体中を触って確かめてみるが、異常なところは何もない。

「……あれ？　でも……どんな夢だっけ……？」

　リアリティがあった夢だったという事は覚えているが、肝心の夢の内容を思い出す事ができない。先ほどまでは確かにひどい夢だったという記憶があるのに、まるで粒子の細かい砂をザルで掬ったように記憶はこぼれていき、いつのまにか消えてなくなって行った。

「確かみんなが……」

　そう。みんなと離ればなれになって、それで、どうしたんだっけ？

　明確なイメージやシーンではなく、一つの言葉だけが強く頭に浮かぶ。

「……やっぱ……アレが原因だよなぁ……」

　オレは机の上に無造作に広げた新聞の切り抜きやら、雑誌の特集ページが散乱していた。

　そこには大きな文字で、「バラバラ連続殺人事件」「今世紀最期の衝撃」などのセンセーショナルな文字が踊っていた。

　オレはもうすっかり夢の内容を忘れていた。それと同時に気持を切り替えるとダイナミックにベッドから跳ね上がり、「よし！」と気合いを入れた。

＊

「Ｅ記イーキ！　じゃあなー！」

「また明日な、Ｅ記！」

　放課後、クラスメイトたちが部活だのなんだのに向かう中、オレは帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

　廊下ですれ違うたび、オレの名前を呼んで来るクラスメイト達たち。

　そのひとつひとつに挨あい拶さつを返しながら、オレは目的の場所へと向かっていた。

　老朽化が進む二階建ての木造建築物。その二階のある部室が、オレの目的の場所だった。

　──そうして、オレは『いつも通り』音楽室の、ドアを開いた。

「ウィーッス！」

――自己分析をもって、百点の点数をつけることのできる回答が、人にはそれぞれあるのだそうだ。

　オレ、Ｅ記イーキにとって、そんな自己分析の回答は「元気！」だろう。

　というか、自己分析じゃなくてもそうだと言える。

　見た目から漂う元気オーラがやばい。

　オレはとにかく、元気だけが取とり柄えの男だった！

「お、Ｅ記～おっつー！」

　オレの名前を呼びながら軽く手を挙げるのは、Ａ乃エーノ。

　少し焼けた肌、動きやすいようにと短くされたスカートの下には体操用のスパッツを穿はいており、短く切きり揃そろえた髪型からも、爽さわやかで快活そうな印象を受ける。

　実はレトロゲームが好きらしいのだが、そんな印象は全くなく、なんというか全体的に、スピード派です！　という雰囲気の漂う女子生徒で、その軽量そうなボディは、無駄な贅ぜい肉にくが無く……、主に胸部にも……、その、なあ……？

「死ね！」

「うわあ!?」

　突如Ａ乃のものすごい鋭さを持ったパンチが、オレの顔面めがけて繰り出される。

　いやほんと、よく避けれたよ!?　突然なんなの!?

「……な、なにすんだよおまえ！」

「あんたがあたしの胸を見ながら、軽量化……はぁ……とか呟つぶやいて溜ため息いきつくからでしょうが！」

「……え!?　エスパー!?」

「声に出てたわ!!　一機死ね！」

　さらにもう一撃繰り出される抉えぐるようなパンチが耳をかすめる。

　ちょ、マジでもう、手加減する気ゼロじゃないですか！

　オレの人生はヒゲの親父おやじと違ってライフ一機しかないんだよ……！

「……あ、あ、あの、あの……やめてくだ……さ、いぃぃ……」

　そんなオレ達たちの間に、小さな人影が入ってくる。

　そこには、オロオロと心配そうな表情をした、Ｂ香ビーカがいた。

　Ａ乃エーノよりも小さな身長、Ａ乃よりも女性らしいフェイス、気弱だが、えへっと笑うとちらりと八重歯が覗のぞくのもポイントが高い。名前もそうなのだが、もうどこからどう見ても女子力満点といった印象のこいつは、しかしながら男子生徒だった。

　すぐに成長するから、と言われて買ったダボダボの制服を着ているのだが、明らかに袖そでの長さが長く、いわゆる萌もえ袖と言われる状態になっていた。

「……やっぱり女子としてはＡ乃の方が圧倒的に敗北の──」

「しねえええええ!!」

「あぶし!?」

　いかんいかん、またしても思考が表にだだ漏れになっていたよう

だ。

　今回は脇腹にＡ乃のボディ攻撃がヒットする。

　これはジワジワ効いてくるやつだ。

　というかＢ香はなんで顔を赤らめてるんだよ！　女子か！

「……相変わらずうるさいですね」

　教室の奥の方で読書をしていた女子生徒が、本を閉じてこちらに目を向ける。

　彼女の名前はＣ奈シーナ。真面目まじめそうな眼鏡、パッツンの前髪など、どこをどうみても委員長キャラ！　もしくは秀才キャラ！　なのだが、実際のところはメチャメチャ学校の成績がいいという訳ではなく、やたらマニアックな雑誌などを読んでいる、オタク系女子だ。

　身長はＢ香よりもさらに低く、オレなんかと並ぶとかなり小柄な女性だと言える。

　まあ、身長の方は小柄なのだが……胸部の、贅ぜい肉にくなんかは、かなりの？　ものを？　持っていらっしゃるとか？　いないと……。

「死ね!!　死んで一生コンテニューするな！」

「ひどいよぉ！」

「あぶし！　おうし!?」

　再三に渡ってのＡ乃エーノの攻撃、そしてなぜかＢ香ビーカからも攻撃を受ける。

　ちょっと待っておかしくない!?

　そもそも人生に『コンテニュー』なんてある訳ないだろ……！　Ｂ級映画の続編じゃないんだから…!!

　そんな事言っている間にＣ奈シーナはまた本を読むモードになっ

てるからね。

「あははー E 記イーキは相変わらず、面白いなあー（ポリポリ）」

　後ろから間の抜けた声が聞こえてくる。

　スナック菓子をポリポリと食べながら笑っているのは、Ｄ介デイースケだった。

　長い髪の毛を軽く後ろで縛っており、前髪はそれでも長く、目が見えないくらいだった。表情が見えないからか、いつもボーッとしているような印象が強い。

　オレよりも高い身長を猫背で丸めて歩きながら、いつもなにかのお菓子を食べている。

　……前振りは長くなったが、これがいつも音楽室に集まるメンバーの５人だった。

　みんな高校二年生になったばかりである。

　音楽室に集まると言っても、俺たちは吹奏楽部でも軽音楽部でもない。

　ずばり！　映画研究会だ！

　……と言っても、実はほとんど廃部寸前の状態だったところを、オレが面白そう！　と彼らを巻き込んで復活させたばかりで、活動はしっかりと出来ていないのだった。

「しかしそんな事ではいかん！」

「……ん？　何よいきなり？」

「うーん、やっぱり、映画研究会である以上、映画を撮らなければと思うんだよ！　というか、映画撮るの、面白そうじゃね!?」

「……俺は……もともと……映画撮りたくて……来てるよ？（ポリポリ）」

「Ｄ介はビデオカメラも持ってるしな！」

「…………ホラーなら、興味はあります。それとＰＣを使っての編集も」

「さすが、Ｃ奈！　あ、そう言えばこの間借りたホラー映画怖かったぞ！」

「……ああ～俺も借りたけど、なんかオチがいまいちよく分かったような分かんなかったような？」

「シュレディンガーの猫のような哲学的な思考実験に逃げるようじゃ、二流どころか、三流脚本家よね」

　Ｄ介デイースケとＣ奈シーナが話を続ける中、Ａ乃エーノが話に割り込んできた。

「あたしは青春っぽい事できるなら、なんだっていいよ？　映画制作だって、すっごい楽しそうだと思うし！」

「おお、Ｂ香ビーカは？」

「……ボ、ボクは、あの、みんなが、やるなら、手伝う、よ……」

　予想はしていたが、５人の意見はほぼ一致していた。

　さすがオレが見込んで集めた精鋭達たちである！

「それでオレは考えてきたんだ！　オレ、監督脚本演出プロデューサー！　お前達４人が出演、スタッフを担当する作品を……！　この作品を、夏までに作り上げよう！　まずは作品を作るということについて、どう思う？」

　オレはそう聞いてみんなを見回す。

「作品次第だけど……いいんじゃない？」

「……すごい……楽しみ……」

「……いいと思います」

「おっけ～」

　みんないつもと変わらないように見えるが、その期待感をひしひしと感じる。

「……じゃあ、お待ちかねの作品案だ……」

　オレはチョークを取り、黒板に大きく、その難しい漢字を書く。

「テーマは、オレ達で、新しい『都市伝説』を作ること……字面が少し大げさで厨ちゅう二病を発揮してた方がいいかなということで考えてきた！」

　黒板にその文字を書き終わると、みんなの方を向いて言った。

「──タイトルは、『終焉シユウエンノ栞シオリ』だ」

「しゅうえんの……しおり？」

「……それってもしかして」

「そう！」

　オレは待ってましたと言わんばかりに４人の方を向いた。

「巷ちまたを賑にぎわせている『名ナ無ナしの栞シオリ』をもじって作ったんだ！」

「『名無しの栞』って、あの……？」

「今朝もテレビでやってたよね」

『名無しの栞』

　インターネットの巨大掲示板に書かれた一連の犯行声明。

　そして現実世界に染み出た連続バラバラ殺人事件。

　犯人はまだ見つかっていない。

　犯人は子供だ。

　いや、犯行は大人によるものだ。

　複数の犯人によるものだ。

　世紀末滅亡論を信じる新興宗教団体の活動だ。

　などなど、連日連夜テレビの話題を独占している。

　インターネットに書かれた不可解な声明は、まるで詩のように美しく、一部の評論家が文学的な価値が高いとまで言ったことで、不ふ謹きん慎しんだと物議をかもした。

　今はネット上から削除されているようだが、その文章の一部は高

校生を中心にチェーンメールで日々拡散され続けている。

　数年前の連続殺人事件以降、もっともセンセーショナルな事件、そして……

　──この世で、もっとも新しい都市伝説。

　今まさに新しい都市伝説が作られ、そして、暴かれる瞬間に立ち会っている。

　そういったある種の興奮が、人々の口の端から漏れている。

　それは、オレにとっても当然そうだった。

「……あんた、そういうの好きそうだもんねー」

　Ａ乃エーノが呆あきれたような顔をしてそう言った。

「なんだよ～、いいと思わね？　ロマンがあると思うけどなー？」

　確かに不謹慎ではあると思うし、近所の人間からすると不安で夜道は歩けないと思う。

　だが、どこかこの事件は「映画やテレビの中のこと」もしくは「ゲームの中のこと」のように感じられて、観客的なワクワク感を感じさせる。

　同意を促うながすように、ちらっと周りを見渡す。

「……私はいいと思います」

　目が合うと、Ｃ奈シーナは一息ついてからそう答えた。

「やはり、映画と言えばホラーですし、私も『名ナ無ナしの栞シオリ』には興味がありますからね」

　さっすがＣ奈である。

「俺も別にホラーだろうが、なんだろうが問題ないよ～」

「……ボクも、怖いけど……がんばる……！」

　一人一人を見てそれぞれの肯定の意を確認してから、再度Ａ乃の顔を見た。

　Ａ乃はやれやれという表情で大げさなジェスチャーをすると、溜ため息いきをつきながら答えた。

「……いいんじゃない？　ホラーゲームも好きだしね～。で、肝心の内容は？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた……」

　オレは前髪を少し手で払い分けながら、自信満々にこう答えた。

「──決まってない！」

　ブォン！

「うおおお!?」

　Ａ乃エーノの拳が再びオレの頬ほおスレスレを掠かすめて行く。

　というか瞬間移動!?　え？　さっきまで椅子に座ってたよね!?

　おまえはどこの格ゲーキャラだ！

「な、なにすんだよ!?」

「なにすんだよじゃないでしょ!?　なんでそんな自信満々なのよ!?」

　Ａ乃は語気を荒らげながら睨にらんでくる。

「ば、馬鹿野郎！　ちゃんとテーマは決まってるんだよ！　ただ細かい内容はこれからみんなで決めていくんだって！　お、落ち着いて最後まで聞けよ……！」

「……テーマ？」

「ああ、さっきも言ったけど『新しい都市伝説』を作りたいんだよ。オレ達たちで」

「新しい……都市伝説？」

　これまでオレ達のやりとりを静観していたＣ奈シーナが、都市伝説という言葉を聞いて興味深そうに聞いてくる。

「基本的には元々ある都市伝説を集めるところから始めたいんだけどさ……」

「ん～？　それだと、新しい都市伝説にならないんじゃない？」

「フフフ……そこは秘策があるんだ」

「……なんか怪しいけど……」

「まあ、ちょっと待てって」

　Ｄ介デイースケやＡ乃の質問を躱かわし、含み笑いをするオレにＢ香ビーカがおどおどと質問してきた。

「そ、それで、どうやって内容は決めていくの……？」

「おお、そうだった」

　オレは思い出したかのように顔を上げると、鞄かばんからなるべくシンプルで、少し古い感じのノートを取り出した。

「──これから、みんなで都市伝説を集めてもらう」

「……はあ？」

「これは、脚本の内容にも関かかわってくることだ」

「……言ってる意味がよくわからないのですが……」

「フフフ……あせるなって。作品のあらすじはこうだ」

　怪け訝げんな顔をするＡ乃エーノとＣ奈シーナに向かってさらに続ける。

「君たち４人はこの映画の中では『オカルト研究会』の部員。普段から都市伝説の噂うわさとかを、このノートで交換しあっている」

「う、うん」

「そして、ある時、こんな噂を耳にするんだ」

「……噂？」

「そう」

　オレは黒板に書いた文字を横目で見る。

「この世の中のありとあらゆる都市伝説が記されているという、謎の本……『終焉オワリノ本ホン』とその本に挟まれている『終焉シユウエンノ栞シオリ』の存在を……」

「…………お、おわりの、ほん？」

「その本にはこの世の中のありとあらゆる噂話が記載されており、栞しおりの挟まっているページを開くと、その噂が現実のものになってしまう……」

「……うん……」

「４人は噂を集めているうちについにその本を手に入れた……！　そして、噂の通り今まで集めていた都市伝説がなんと、現実世界でも起こってしまう……！」

「……」

「……」

「……」

「……」

　みんなはこちらを向いたまま、しばらく固まっていた。

「…………ん？」

　しびれを切らしたかのようにＡ乃が口を開く。

「…………そ、それで……続きは？」

　オレは前髪を少し手で払い分けながら、自信満々にもう一度こう答えた。

「──決まってない！」

　ゴスッ！

「おうし!?」

　今度はＡ乃エーノの強烈なパンチが腹にあたる。

　いやだからボディはやめろって！

「ちょ、ちょっと待てって！　そ、そんなもの後から決めていけばいいんだよ！」

「はぁ!?　あんたそんな適当な事で映画なんて撮れると思ってんの!?」

「と、撮れるに決まってんだろ……!?　アレだよ！　ドキュメンタリースタイルだよ！」

「絶対今適当につけたでしょう！　というかただ単に決められてないだけじゃない!?」

「ん、んなことないって！　Ｃ奈シーナはどう思うよ？」

　Ａ乃は相変わらずギャアギャアと喚わめき散らしているが、少し難しそうな顔をしていたＣ奈に話を振ってみる。

「……悪くないと思います」

「お！　だろー⁉」

「えー！」

　Ａ乃は不満げな声をあげるが、Ｃ奈はそれに構う事なく、まるで独り言のようにブツブツと続けた。

「それなら……これまでの私の知識も役に立ちますし……ゼロから都市伝説を作るよりも……それ自体をまとめて都市伝説にしてしまえば……なるほど……なによりも多くの都市伝説を一気に紹介することが出来ますし……」

「……Ｃ奈……？」

　苦笑いをしながらＡ乃が声をかけるが、Ｃ奈の耳にはそれが届いていないようだった。

「俺も悪くないと思うよ～まあ結局映画なんて、撮り始めてみないと、どれくらい時間掛かるのかとか分かんないしさ。まずは前半部分だけでももう少し決めて、そこからやってけばいいんじゃない～？」

　いまだにＣ奈の独り言が続く中、Ｄ介デイースケも同意をしてくれる。

「……あ、ボクも……みんなで作るのって……嬉うれしいから……」

　そしてＢ香ビーカが控えめに掩えん護ご射撃をした事で、いよいよＡ乃も降こう参さんしたように、溜ため息いきをついてから手を上げた。

「……もう、分かったわよ。で、何から始めればいいの？」

「そうこなくっちゃ！」

　オレは笑顔のまま、待ってましたと言わんばかりに先ほどのノートを掲げる。

「改めて説明するけど、４人はこの映画の中では『オカルト研究会』の部員。普段から都市伝説の噂うわさとかを、このノートで交換しあっている」

「……うん」

「だから、これから４人で『あたかも普段からオカルト研究会の活動をしています』という感じの情報交換記事を書いていって欲しい」

「情報交換って、具体的になにを書けばいいの？」

「例えば『こんな噂知ってる？』から始まって都市伝説の話を書くとか、とにかくオカルトに関係しそうな噂ならなんでもいいから集めてるっていう設定でいきたいかな」

「つまりそれって……これが映画のネタ集めって事？」

「複雑なんだけど、ネタ集め兼小道具作りって考えてる。これも撮影で使うつもりだから、ざっと２ヶ月分くらいはありそうだなーって情報を、日付とかは適当でいいから１週間でつくって欲しいんだ」

「ええー!?」

　Ａ乃エーノが再び不満げな声をあげるなか、俺はさらに続ける。

「集めるネタの中には『終焉シユウエンノ栞シオリ』についてもぜひ触れていて欲しい、そして、それ以外の集まった情報の中から、良さそうなものを選んで映画の脚本にも反映させていきたいと思ってる」

「……Ｃ奈シーナはいいけど、あたしそういうの知らないし」

「……うふふ……そういう雑誌……貸しましょうか？」

Ｃ奈が不敵な笑みを浮かべるなか、Ｄ介デイースケが二人の間に入るように続けた。

「話聞く限り有名なのとかでもいいってことだし、Ｃ奈から情報集めたって構わないんでしょ～？　まあ頑張ろうよ～」

「うー……分かったけど。……ていうかＥ記イーキは参加しないわけ？」

「ほら、オレは監督だから！　ストーリーの中に居ない人物が登場してたらおかしいだろ？　だからオレは参加しない！」

「そんなのズルじゃん！」

「ズ、ズルじゃねーよ！　それに、オレはとっておきの出番があるんだよ！」

　懲りずに険悪な雰囲気を醸し出そうとする二人の間に、Ｂ香ビーカが入りこんでくる。

「……あ、あの……やめてくだ……さ、いぃぃ……」

──とにかく、そんなこんなでオレ達たちは映画を作ることになった。

　半ば強引な流れだったとはいえ、作ることやその内容が決まってからはみんな積極的に意見を出してくれる。

　本当にみんないいやつらだと思う。

　そして映画の議論や確認、そしてそれ以外のどうでもいい話をしていると、あたりはすっかり暗くなっていた。

　夜の黒が夕焼けの赤に浸食し、染め上げげていく。

　まるでオレ達の行く末を暗示しているようだったが、しかしその時はまだ、これからの制作活動にただ期待を膨らませるだけだった

一。

CHAPTER3
何となくが四つ。

何となくが四つ。I　□あの日咲いた花は笑顔の虹色かどうか僕達たちはまだ知らない。ー

　映画を制作すると決めてから、１週間が過ぎた。

　今日は小道具であり、映画のネタ元になる「オカルト部員達による情報交換ノート」が完成しているはずの日だった。

「ウィーッス！」

「……おっつー……」

　オレがいつも通り元気にドアを開けると、そこにはいつもとは真逆で、元気無さげに机に突っ伏しているＡ乃エーノの姿があった。

「……ど、どうした……？」

　首だけこちらに向けたＡ乃の目は、虚こ空くうを見つめている。

「……どうしたじゃないわよ……大変だったんだからね……！」

　そう言って差し出して来たのは、先日４人に預けたノートだった。

「ちゃんと出来てると思うよ～」

「……が、がんばっ、たよ……？」

　普段からテンションが高い方ではないので分からなかったが、よくみるとＤ介デイースケやＢ香ビーカも疲れ果てたような雰囲気を醸し出している。

　ノートを手に取って中を見てみると、そこには約２ヶ月に渡ってやりとりされたように見える、交換ノートが完成していた。

「うおおおー！　すげえ！」

　オレが感動の声を上げていると、これまで一切表情を崩さなかったＣ奈シーナが、普段は見せないような表情をして語り出した。

「ふふふふふふふふふふ。どうですか？　すばらしいでしょう!?　私の家にある、ありとあらゆる文献を調べ直してみたり、Ａ乃さんが友達や先生に聞いて回ったりした話を資料としてまとめたこのノート！　書いている途中テンションがあがって来てしまいまして、アレンジなんかも加えてみたりしたんです！　正直とってもとっても楽しかったのでいっそのことこれはこのままこの部活においてのルールとして常にやっていくという方向で考えてはどうかと思ったりもするのですが──」

「……な、中身はどうなってんのかなー？」

　Ｃ奈シーナがうっとりとした顔で、これまた虚こ空くうを見つめながらしゃべるのをやめないので、無む理り矢や理りに話を遮さえぎる。

「□□……！」

　しかし、少し目を通しただけで、オレはそこに書かれている内容にすっかり釘くぎ付づけになってしまった。

　そこにはオレが聞いた事のないような都市伝説や、この学校独自のものなどもあり、一見しただけでも凝こっているのが伝わってくる。

「……すげえ……！」

「努力を無駄にするんじゃないぞ？　……監督」

　疲れている様子ながら、こちらに笑顔を向けるＡ乃エーノ。

　気がつけば、Ｄ介デイースケやＢ香ビーカ、そして先ほどまでひとりしゃべりをしていたＣ奈もまた、こちらに笑顔を向けていた。

　いいだしっぺのオレは、みんながここまで頑張ってくれたことがとても嬉うれしくて、ついつい少しだけ大きな声でこう答える。

「──まかせとけって！」

*

　そして、それからオレ達たちはみんなでしばらくこのノートの内容について話し合った。

　たくさんの都市伝説の話の中から、映画で使うための４つの話を選ぶためだ。

　多くのいい話が集まっているために、会議は思った以上に難航していた。

「……うーん、しかしいい感じの話が多くて悩むな……」

「確かにね～」

「『笑う自殺者』とか『窓際の女』みたいな怖い話もいいでしょ？」

「……あ、そ、それ……それすっごい怖かった……です」

「ただまあ、映画で撮影するのは難しいよな～」

「あ、そっか、そういうのも考えなきゃだよね」

「登場人物がそういうのを話してるくらいだったらいいんだけど」

　題材となる都市伝説の名前を書きながら、ああでもないこうでもないと議論を重ねる。

「『メリーさんの電話』もいい感じだなー。携帯電話使ってるってのがいいな」

「それは私が書いたやつですね」

　Ｃ奈シーナが得意げな表情で答えた。

「ちなみに私の方では学校の怪談を中心としたオリジナルシナリオをご用意したのですが、そちらはいかがでしょうか？　都市伝説も素敵ですが、より多くの方の賛同を得るには老若男女の共通点を作ることが大事かと思われます。その点だけで言っても学校という場所はもってこいですし、終焉オワリノ本ホンに対抗して終末ノ本という設定も用意して──」

「えー！　都市伝説にしようよ。怪談とか……ちょっと怖そうだし……」

「そうだな、今回は都市伝説くくりにしよう！　せっかくＣ奈の考えてくれた話だけど、それは次回案ということにして……となるとあとはまあ、『ひとりかくれんぼ』とか、『ドッペルゲンガー』とかかな……？」

「そうだね～その辺りはまあ、いろいろと撮影もしやすそうだよね」

　ひとりかくれんぼという都市伝説についてはオレはこのノートで初めて知ったのだが、具体的に何かが出てくるわけではないのに気味の悪さが伝わってきて、とてもよい題材だと思った。撮影についても誰かの家で行う事ができれば、特に小道具なども手に入らないものはないと思う。ドッペルゲンガーについても同様で、一人で二役やらなければいけないという演技力の問題は出てくるが、カットワークなどをきちんとすれば演出できそうだ。

「……あと一つは……」

今のところ４人の登場人物にそれぞれ別の怪奇現象が襲うことになっている。

そのため、今まで出た３つを採用するとなると、残りはあと一つになる。

「……あ、あ、じゃあ……これは……？」

Ｂ香ビーカが控えめな声量で一つの都市伝説が書かれたページを指差した。

「……『夢の結末』？」

話の内容はこういうものだった。

ある女の人はここ数日、いつも同じ夢を見ていた。

深夜に行ったコンビニである男と目が合い、そして家に帰る途中、その男に追いかけられ、メッタ刺しにされて殺されてしまうという夢。

気持ち悪い内容ではあったが、しょせん夢は夢だと思っていた。

そしてある日、深夜にふらりとコンビニに行くと、そこに、いつも夢で見ている「あの男」が居た。

女の人は驚いたものの、「きっと以前にもコンビニで実際に見た事があって、それを勝手に私の夢の登場人物にしてしまっているだけだ」と思うことにした。

しかし、やはり気味が悪くなって、買い物もせずに足早に家へと帰る。

心臓がドキドキし、まるで後ろから誰かが追いかけてきているような恐怖を感じる。

家の中に入ると、すぐにドアを閉じ、鍵かぎを掛けた。

「……やっぱり夢は夢だよね……」

たまたま見掛けただけの人をまるで犯罪者扱いしてしまって悪

かったな。ドアに背中をもたれながら、そんな風に思っていると、その時、確かにドア越しに声が聞こえた。

「――夢と違うこと、するなよ」

　ノートに書かれた噂うわさ話ばなしを読んで、背筋がぞくぞくとするのを感じる。

「うえ～……！　怖ええええ～！」

「夢に関する噂話って、独特の後味の悪さがありますよね。『猿さる夢ゆめ』とかもそうですし」

「わ、私こういうリアリティあるのダメだわ……」

「あ、『猿夢』と言えばさ――」

　その後、オレ達たちはその話についていろいろと議論した。

　しかし結局のところ、『夢の結末』は今回撮影で扱う４つの話には入らないことになり、題材には『メリーさんの電話』『ひとりかくれんぼ』『ドッペルゲンガー』そして、『猿の手』という怪奇が選ばれることになった。

　各自の担当はこうだ。

　Ａ乃エーノが『ひとりかくれんぼ』

　Ｂ香ビーカが『ドッペルゲンガー』

　Ｃ奈シーナが『メリーさんの電話』

　Ｄ介デイースケが『猿の手』

　それぞれの担当を決めた経緯はいろいろとあるが、最終的には

キャラクターに合っている気がするというところでこのような割り振りになった。

　オレは、Ｂ香ビーカが少しだけがっかりしているように見えたので、肩に手を掛けてこう言った。

「オレは『夢の結末』好きだったけどな！」

　Ｂ香は最初なにを言われたのか意味が分からないようだったが、すぐに笑顔になってこう答えた。

「え？　あ、あ……あの……ありが……と……？」

「せっかくだから、オレは『夢の結末』担当な！」

「それって別に映画と関係ないじゃない」

「あはは～でもいいかもね、Ｅ記イーキの担当も決まって～」

「……まあいいんじゃないですか？　私もあの話、嫌いじゃないですし」

　もちろんＢ香の事を励まそうという気持ちもあったが、半分くらいはオレには担当の話が無いのが寂しいというのもあったかもしれない。そんな事を見透かしてか、みんなはヤレヤレという表情をしながらもこんな戯たわ言ごとに付き合ってくれる。やっぱり、改めてコイツらはいい奴やつらだ。

「とにかくがんばろうぜ！　映画撮影！」

　こうしてざっくりと映画の題材が決まったところで、今日のとこ

ろは家に帰ることにした。帰り道の途中も、こういう演出はどうか、どういう小道具が必要か、などの話が尽きることは無かった……。

何となくが四つ。II　□容疑者Ｃの動機ー

　またしばらくが経たった後の事である。

　物語の題材も決まり、おおよその台本も出来たところで、オレ達たちはついに撮影を開始することになった。

　撮影を始めるにあたって登場人物の名前を決めなければいけなかったのだが、それはそれでひと盛り上がりあった。

「……なにげにさ、登場人物の名前決めるのって難しいよな」

　オレはみんなからのノートを元にほぼほぼ台本を書ききったのだが、いまだに登場人物の名前を決めることが出来ずにいた。

　というか簡単に台本を書ききったと書いたが、これについても実は大変だった。

　オレは当然、脚本を書く事自体がはじめてだったので、書き始めてみるとシーン割りだったりいろいろなところで挫くじけそうになる。

　しかし、このノートを見る度にみんなのがんばりを感じ、オレはＤ介デイースケにも協力してもらいながらなんとかかんとか形にすることが出来た。

　脚本の書き方についても一から勉強したりと、自分の事ながら本当にがんばったと思う。

　元気だけが取とり柄えのオレだが、執筆期間中は目が怖くて近寄れなかったと、後々クラスメイトから言われた。

　まあそんなこんなでほぼ完成した台本なのだが、実は登場人物の名前については後で考えようと空白になっている。

「確かにね～あまりにも現実っぽい名前でも理由が無いし、かといってゲームみたいな名前も違和感あるしね～」

「え～ゲームみたいな名前とかいいじゃん！　レオンとか！」

「どこの国の人だよ！」

「……私はあまりこだわらないので、Ｅ記イーキさんが決めてくれていいですよ？」

「……ボ、ボクも……」

　正直に言うと考えても浮かばなかったから空白なのだが、それを言えるような雰囲気でもない。

　どうしたものかと考えていると、Ａ乃エーノが手をあげて笑顔で言った。

「はいはーい！　じゃあさ、みんなの名前をもじるっていうのは？」

「！」

　オレはその発言を聞いた瞬間に、ありだと感じた。

　そもそも、この作品自体が「名ナ無ナしの栞シオリ」からもじって作っていたのだ。なんでそういう発想にならなかったのかと思うほど、ストンとくる意見だった。

「……いいなそれ！」

「でしょ～？」

確かにその考え方なら、あまりにも現実離れした名前にもならないだろうし、オレ達たちに関係がなさすぎる名前にもならない。

「俺もいいと思うよ～」

「……うん、嬉うれしい……！」

みんなに褒められてＡ乃が無い胸を一所懸命に反らしてみせる。

いや、誇らしいのは分かるがほどほどにしないと余計に寂しい事になるから──

「一機死ね！」

「うわあ!?　な、なんだよいきなり!?」

「誰の胸が無くて寂しいって！」

「……え!?　エスパー!?」

「だからあんた失礼なこと考えてる時いつも声に出てんのよ！」

……と、そんなこんながありながらもＡ乃の提案は採用となり、いろいろな組み合わせを考えてみて、結局のところＡ乃がＢ子ビーコ、Ｂ香ビーカがＡ弥エーヤ、Ｃ奈シーナがＤ音デイーネ、Ｄ介ディースケがＣ太シータという名前になることになった。

「なんか少しくすぐったい感じもするけど、いい役名だよね？」

「……はい、ボクもそう……思います……」

＊

そして名前が決まった後は、具体的な撮影内容についての打ち合わせが行われた。

これについては予算や時間、経験がないことから、とりあえずはそれぞれが怪奇現象に遭遇しているシーンを撮影し、それ以外のところについては基本的にはナレーションでどうにかしようという話になった。

結局のところ、ホラー映画なので、怖いシーンが撮影出来るのが一番だという、Ｃ奈シーナのアドバイスからだった。

「なんかこうやって決まっていくと、いよいよ～って感じがするな！」

「まだまだこれからでしょー？」

「確かに、気合い入れていこう！」

撮影の順番はＤ介デイースケ、Ｃ奈、Ｂ香ビーカ、Ａ乃エーノの順番で行うことに。

それぞれの撮影の間は、他の出演者がスタッフとしても働くことにした。

そしてまずは、Ｄ介の話……『猿の手』。

本来の話は名前の通り、小さな猿の手のミイラがあるという都市伝説。

その猿の手は５つだけどんな願いでも叶かなえてくれる夢のアイテムなんだそうだ。

猿の手は最初は５本の指を軽く開いているような形状をしているのだが、願いを一つ叶えるたびに、まるで数を数えるように指が折れていく。

また、願いはなんでも叶えてくれるが、それには代償もついてくる。

例えば、猿の手の能力に関して分かりやすい話として出てくるのがこんな話。

　猿の手を手に入れた男性が願った願い、それは、病気になっている自分の彼女の命を助けて欲しいという願いだった。

　猿の手の指は折れ、願いは叶えられた。

　彼女が元気になったという報告をしようと自分の母に連絡しようとしたところ……。

　━彼の母親が交通事故で死んだ事を知った。

　それは命の等価交換。

　猿の手は０から１を生み出す装置ではない。

　１と１とを交換するだけの装置。

　代償がつきものの、かりそめの神様。

　今回の話は、ある時、ふとしたきっかけでその猿の手を手にしてしまった高校生の悲劇を描くというものだ。なんどか調整はあったものの、台本の方はほぼ完かん璧ぺきだった。

「……そういえば」

「ん？」

「肝心の『猿の手』って、結局どうするんだろうな……？」

　台本の読み合わせが終わり、ある程度のコンテも考えたところで肝心の小道具をどうしようという話になった。

　その時はＤ介デイースケが「ん～なんとかするよ～」と言っていたのだが、撮影当日になってもまだ誰も見ておらず、かつＤ介はまだ来ていなかった。

「まあ、Ｄ介くんの事だし、なんとかするんじゃ……」

ガラッ。

「お待たせ～」

「あ、噂うわさをすれば……って…………それ……」

「……ん？」

遅れてやってきたＤ介デイースケの手にはめちゃくちゃリアルな手のミイラのようなものが握られていた。

　ちょうど猿の手くらいの小さいものだった。

「おおー！　すげえ！」

　オレは描いていたイメージとぴったりのその小道具に、まず感動の声をあげる。

「いや！　すごいよりも先にそれそのまま持って歩いて来たわけ!?　どんな不審者よ！」

「そんな細かいことといいじゃんか、それよりもそれ、どうしたの？」

「細かくないでしょー！」

　Ａ乃エーノに台本で頭を叩たたかれた。痛いっての。

「ああ～これは子供の人体模型の古いのがあるって聞いてたから、その手もらっていろいろと塗装とかして作ったんだ～」

「……じ、人体……模型……？」

「うん、古くて倉庫にある人体模型って趣おもむきがあってよかったよ～」

「お、趣じゃなくて不気味っていうのよ！　そういうのは！」

「マジかよ！　なんかいろいろ使えそうじゃん！」

「うん～大人の模型もあったから、こんな感じで手とか、あと足だけ～とか、バラバラ死体くらいだったら演出的に作れるかもだよ～」

　不気味なことを言うＤ介にＣ奈シーナが食いつく。

「へえ、それはありですね」

「ありじゃない！　目を輝かせない！」

　とにかく、そんなこんなで小道具も準備ができ、今度こそついに撮影が開始されたのだった。

　　＊

　撮影は、放課後１週間ずつと区切りをつけて行うことにした。

　これは映画撮影などにもともと興味があったＤ介の提案だった。

　撮影に慣れていない初心者は、一つのシーンにこだわりはじめ何度も撮ってしまうことが多いらしく、終わりは決めておいた方がいいということだった。

　それも確かにということで、オレたちは一人の話を最大で１週間と決めて撮影することにした。

　そして肝心の台本はこんな感じ……。

　Ｄ介デイースケ、こと、Ｃ太シータはオカルト研究会のメンバー。

　彼は、自然に人に好かれるような人物だった。

　人付き合いの良さを活かしつつも、目立ちすぎることもなく、敵も作らず、うまくクラスの中でも中間的なポジションを保ち続けている。人を茶化すのが上う手まかったが、それでも不快感を感じないのはその柔らかな物腰のおかげだろう。

　彼に言わせれば、完かん璧ぺきに出来すぎてしまうというのは逆に敵を作るものだそうだ。

　クラスで一番目立つような存在になる事もできるだろうが、それを行うことはしなかった。

　かといってある程度以下に劣等的な立場になれば、たちまちクラ

スの上位の連中から見下した目で見られる事になる。世の中を渡っていくということは、バランス感覚に他ならない。

　それが彼の信条だった。

　そんなバランス感覚を大事にする彼にとって、しかし、どうしても傾倒してしまう一人の人物が居た。

　──幼おさな馴な染じみの、Ａ弥エーヤだ。

　Ａ弥は彼とは違い人付き合いに無頓着で、愛想も良くなかった。

　Ａ弥はオレがいないとダメなんだ、そう思い小さい頃から彼をフォローして来ており、オカルト研究会もＡ弥の事を観察するという目的で参加していた。

　オカルト研究会の活動の一つに「オカルト研究会情報交換ノート」というものがある。

　例えば学校の噂うわさで聞いただったり、雑誌で見ただったり、テレビでやっていたことなどを情報交換として行うためのノートだった。

　いわゆる交換日記のようなものだが、特に交流があるわけでもないので、ある意味でみんながそれぞれ独り言を言っているだけのようなものでもある。

「そういえばこの間テレビでやってたんだけどさ……」

「そういえばこんな噂知ってる？」

　という感じだ。また、たまに集まって話をすることもあるが、彼は元々はオカルトに興味があるタイプではないので、聞き役に徹する事が多かった。

　Ａ弥はオカルト話をしている時は饒じよう舌ぜつで、集まってい

る他のメンバーもＡ弥の事を特に変な目で見る事もなく、本当に興味を持って話を聞いてくれているのが分かる。

　彼はそれを、複雑な気持ちで見ているのだった。

　ある時、彼らは一つの噂うわさ話ばなしを聞き、そしてそれに夢中になった。

　──それが、『終焉シユウエンノ栞シオリ』。

　この話は、どちらかというと学校の怪談に分類される話かもしれない。どの本や雑誌などで調べても出てくることがない、この学校にだけ伝わる……本当の噂話。

　噂によると、この学校のどこかに『終焉オワリノ本ホン』と『終焉ノ栞』というものが隠されているらしい。その本にはこの世の中のありとあらゆる噂話が記載されており、栞しおりの挟まっているページを開くと、その噂が現実のものになってしまうというのだ。

　噂では過去に黒魔術を研究していた生徒が作り上げた本だとか、ノイローゼから精神状態をおかしくした先生が書き上げた本だとか……中には数年前に話題になった児童殺傷事件にも関かかわっているだとか、公園から出てきたバラバラ死体にも関係しているだとか……そんな突拍子のない尾ひれはひれもついている。

　恐怖の大王なんかと同じ、信じたいような気持ちと、そんなものないんだろうという諦あきらめの気持ちとが共存したような感情。

しかしある日、彼が情報交換ノートを見てみると、『終焉ノ本』、そして『終焉ノ栞』を手に入れたという事が書かれていた。

「……まさか……？」

　突然の事で、彼は一つの違和感に気がつくことが出来なかった。

　すでにこの情報に対してコメントを残しているメンバーと同じようにコメントを書き込むと、彼はそのノートを鞄かばんにしまい込んだ。

　そしてその日からである、彼の周りで異変が起こり始めたのは。

　まるで世界が突然変わってしまったかのような感覚。

　空気が１グラムだけ重くなってしまったかのような些さ細さいだが確実な違和感。

　しかし決定的に変わったのは、ある日の事である。

　眠りにつけず早く起きてしまった彼は朝早くに登校し、誰も居ない教室で、無防備な状態で鞄かばんを開いた。

「……ッ！」

　そこにはまったくもって予想だにしないものが入っていた。

　一通の手紙と──小さな手のミイラのようなもの。

　手首から上だけのそれは、指が５本しっかりとついていて、半開きの状態だった。

大きさとしては小学生の子供くらいの手のように見える。

突然の非現実的な物体に、彼は恐怖を感じるよりも、まるでまごの手みたいだ、なんて変な感想を持ってしまった。

彼は念のため辺りをキョロキョロと見回すと、教科書などで隠しながらその手紙をゆっくりと開く。

そこには、予想外の事が書いてあった。

《──猿の手を使って、運命に抗あらがえ》

手紙には、先ほどの猿の手が『特殊なアイテム』であるということが書いてあった。

なんでも、５つだけ、どんな願いでも叶かなえてくれるらしい。

確かに、どこかで聞いたことがあった気がする。

どんな願いごとでも叶える事ができる、猿の手という都市伝説。

最初はもちろん疑いながらも、試しにと、小さな願いを口にしてみる。

「……あの本、読んでみたいな」

すると、

──パキッ。

指が１本折れ、願いが一つ叶かなう。

バッグの中に自分が読んでみたいと思った本が入っていたのだ。

どういうことかわからないが、どうやらこれは本当に何でも叶える事が出来るアイテムらしい。

これに気を良くした彼は、もう一つ、もう一つと小さな願いを叶えて行く。

今人気になっている、あのゲームが欲しいな。

──パキッ。

Ａ弥エーヤとお揃いのスニーカーが欲しいな。

──パキッ。

試しに、試しに、とやっている内に、すでに３つもの願いを叶えてしまった。

しかし、その全すべてが叶うことを確認し、いよいよこのアイテムが全能であるということを確信する。

「ふふふ……あと２つは大事に使わないとね……！」

彼はこの猿の手をどう有効に使うべきか考えるのが、楽しくて楽しくて仕方が無くなっていた。

子供じみた考えだが、もう一つ猿の手をくださいなんて願いは可能なのだろうか？

そんなことを考えながら、一日を過ごしていたのだった。

―しかし、そんな彼のもとに思いがけないプレゼントが届く。

　それは、家に帰り、自分の部屋でしばらくの間ゆっくりした後のことだった。

　……カタッ。

　無機質な音が部屋に響き渡る。

　彼はぼーっと部屋の中を見渡した。

　そして、部屋の中に見たことの無い本を発見する。

「しゅ……」

　彼はそれが何であるか理解した瞬間に、血の気が引いたように青ざめた顔をする。

　声が出ないように自分で自分の口を必死に塞ふさぐ。

　真っ黒な本に黒猫が描いてある栞しおり……

　そう。『終焉オワリノ本ホン』と『終焉シユウエンノ栞シオリ』がそこに。

「―本当にあったんだ」

　彼が自分で客観的に自分の顔を見る事が出来たなら、どんな顔をしていたことだろうか。

恐怖に引きつりつつも、口の端が鋭角に持ち上がり、眉まゆ尻じりは下がり、泣いているのか笑っているのかよくわからないような顔をしている。

彼はカタカタと震えながらも、『終焉ノ栞』の挟まれているページを開く。

そこには、まさに『猿の手』の、本当の力の事が書かれていた。

かりそめの神様。まがい物の能力。

求められる代償。

そして、等価交換の報復。

「……なっ……！」

彼は信じられないと思いながらも恐怖を感じる。

「確かに……クラスの連中が……盗難とか……そういう話をしてたけど……でもっ……！」

彼は得体の知れない恐怖を感じた。

俺には関係ない、俺には関係ない、俺には関係ない……！

そうだ、もうこれ以上このアイテムを使わなければいいんだ！

そうすれば問題なんかおこりっこない、代償なんて……！

彼はその日、猿の手に厳重に封をすると、それ以降目につかないように押し入れの中にしまい込んだ。

—だが、そんな彼をあざ笑うかのように、彼の周りの怪奇はさらに加速していく。

不気味な視線を感じるようになる。

誰かに追われているように感じる。

駅のホームで誰かに押されたような気がする。

そんな事が続き、次第に疑心暗鬼になって行く。

そして、次第に確信にも似た考えが、彼の中に浮かび上がる。

オカルト研究会の中に、犯人が居る。

どこでどうしてそういう思考になったのか、彼自身にも分からなかった。

ただ、彼が追いつめられているという事を知っている人物で、しかも『終焉オワリノ本ホン』『終焉シユウエンノ栞シオリ』などの事を知っている人に違いない。

そういう風に考え始めると、疑いしか持つ事ができなくなってしまったのだ。

—曇った目で見ているせいか、違和感にも気がつくことが出来ない。

彼は残り２つのお願いを、犯人を突き止めるために使おうと決心する。

「考えろ、考えろ、考えろ、考えろ……！　どうやったら犯人が分かる……？　どうやったらそいつをあぶり出す事ができる!?」

　条件は等価交換のアイテム。

　自分の望むものを得る代わりに、何かしらの代償が支払われる。

　例えば自分に悲劇を望むとどうなる？　いやだめだ、それじゃどうすることもできない。じゃあ自分自身を別の誰かにすり替える？　そんなことが可能なのか……？　どうしたらどうしたらどうしたら……！　犯人を見つけてやる……！　そして見つけたら……！

　そんな彼の考えも空むなしく、事態はさらに急展開していく。

　オカルト研究会のメンバーの一人、……Ｂ子ビーコが死んだ。

　いや、状況から見ても、殺されたと言っていいだろう。

　彼以外にも何かに巻き込まれているメンバーが居たのだ。

　彼は混乱し、ますます、犯人の存在を確信する。

　次は自分の番だ。

　次は自分の番だ。

　次は自分の番だ……！

　打つ手も無く、ただひたすらに怯おびえている毎日。

犯人を見つけたら殺してやる！

　犯人を見つけたら殺してやる！

　犯人を見つけたら『猿の手』を使って、残酷に嬲なぶり殺ごろしてやるっ……！

　犯人はどっちだ、Ｄ音デイーネなのか……？　Ａ弥エーヤ？　いや違う。そんなわけがない。Ａ弥は俺の親友なんだ！　Ｄ音だ。きっとそうだ。

　錯乱した思考回路でのそれは、推理なんかではない。

　──絶望的かつ希望的観測。

　そうあればいいという……ただの……『願い』だ。

　──パキッ！

「……ひっ！」

　乾いた音がしてそちらを見ると、そこには「もう絶対に使わない」と決めて、念入りに封をし、押し入れの奥にしまい込んでいたはずの『猿の手』があった。

　その指は５本全部が折れ、彼の足首を……がっしりと掴つかむ形になっている。

「……どういう……こと……!?」

彼の思考は遡さかのぼる。

こうに違いない、という思いはやがてこうあって欲しいという願望に変わっていった。

彼は考えていたはずだ。

Ｂ子ビーコが犯人に違いない。

もしそうなら、殺してやるって。

そして、さっきも考えたはずだ、Ｄ音デイーネが犯人に違いないって、そして……、

残酷に嬲なぶり殺ごろしにしてやる……って。

「ああああああああああああああああ！」

*

「……」

「……」

「……」

「……ん～？　どうしたの～？　みんな」

熱演を終えたばかりのＤ介デイースケがけろっとした顔でこちらを向く。

「……い、いや！　あんた！　そんなとぼけた顔して……！」

「すげえ！　Ｄ介の演技めちゃめちゃよかった！」

「ふふふ、とてもいい映像になっています……ふふふ……」

「……こ、こ、こわ……猿の……手が……」

　オレは興奮していたが、Ｂ香ビーカは本気で怯おびえているし、Ｃ奈シーナは早くもいいホラー映画が撮れそうなことにうっとりしているし、Ａ乃エーノは自分の番の演技を考えてプレッシャーを感じているようだった。

　みんながみんないろいろな反応をしているが、Ｄ介が頑張ってくれたのは確かだった。

　ただ、当の本人はすっかり空気を切り替えてお菓子をほおばっている。

「新作の……スナックが……やめられない……とまらない……（ポリポリ）」

　さすがＤ介である。

　でも、たぶんこれも彼なりの照れ隠しなんだと思う。

　これは幸さい先さきのよいスタートとなった！

「ウッシ！　これで『猿の手』編は終了だな！　来週からはＣ奈シーナ……『メリーさんの電話』編の撮影開始な！」

何となくが四つ。III　□容疑者Ｄの黙秘ー

　先週のＤ介デイースケの熱演のおかげで、オレ達たちのモチベーションはさらにあがっていた。

　今週からはＣ奈の撮影になる。

　Ｃ奈は本格的なオカルトマニアで、そういった類たぐいの雑誌や、ホラー映画などさまざまなものを日常的に愛好している。

　Ｃ奈の担当する都市伝説は『メリーさんの電話』。

　いわゆる「私メリーさん」で有名な都市伝説だが、今回は出演もしているＣ奈自身が、現代版にアレンジを加えている。

　ちなみに通常有名なのはこのような話。

　ある少女が、これまで遊んできた人形である「メリー」を捨てる。

　その夜、両親がちょうどいないとき、一本の電話が掛かってきた。

「私メリー、今、ゴミ捨て場にいるの」

　気味が悪くなった少女はすぐに電話を切る。

　しかし電話はすぐ掛かってきて、

「私メリー、今、公園にいるの」

「私メリー、今、３丁目の角にいるの」

　というように、次第に家に近づいてくる。

　そしてついに……。

「私メリー、今、家の前にいるの」

　という電話を受け、少女は恐れながらも家のドアを開ける。

　しかしそこにはメリーの姿は見えなかった。

　悪質な悪戯いたずらだったんだ。そう思った途端にもう一度電話が掛かってくる。

　今度は「悪戯でしょ？」と言ってやろうと強気になって電話に出る少女。

　しかし……。

「私メリー、今、あなたの後ろよ」

　というものだ。そして、今回の撮影も意外なまでにＣ奈シーナが高い演技力を見せつけ非常にスムーズに進んだのだが、ラストシーンである「メリーさんから電話が掛かってくる」シーンについては、Ｃ奈の家で撮影を行うことになっていた。

　土曜日がちょうどＣ奈の親も出かけているらしく、オレ達たちはその日に家にお邪魔することにした。

「おっじゃましまーす！」

「Ｃ奈～！　来たよ～！」

「いらっしゃいませ」

「……お、おじゃま……します……」

「おお～豪邸だね～」

　Ｃ奈シーナの家は郊外の高級住宅街の中にある一軒家だ。

　そういえばオレは休日に初めて会うが、Ｃ奈の普段着というのも斬新なものがある。

　眼鏡や髪をまとめているのは普段のままだが、普段よりも家の豪ごう奢しやさも加わってお嬢様度が高く見える。

　ちなみにＡ乃エーノやＢ香ビーカ、Ｄ介デイースケも普段着だ。Ａ乃はショートパンツにパーカーという非常に動きやすそうな服装で、Ｂ香はドット柄のシャツに少しゆったりめのカーディガンを着ている。Ｄ介は黒の上下、オレはジャケットにジーンズという感じだ。

　いや、しかしこうやって私服で集まってみるとなおの事、その、なあ……？

　主に胸部の辺りの格差社会が……。

「死ね!!　死んで一生コンテニューするな！」

「ひどいよぉ！」

「あぶし！　おうし!?」

　ふふふ、来ると思ってたぜ。

久しぶりのこの感覚、後から効いてくるタイプのやつだぜ……！

「とりあえず私の部屋にどうぞ」

「あれ!?　無視なの!?」

　とまあ、普段と変わらず和気あいあいとした雰囲気で撮影は開始された。

*

　Ｃ奈、ことＤ音デイーネの担当する話の内容はこのような感じだ。

　彼女はＣ太シータと同じく、オカルト研究会のメンバーの一人。

　学校で噂うわさの『終焉オワリノ本ホン』、そして『終焉シユウエンノ栞シオリ』を手に入れたという事が、情報交換ノートに書かれていたところから、彼女もまた、不思議な出来事に巻き込まれて行く──。

　彼女はどちらかというと普通よりも少しおとなしい、クラスでもまったく目立たないような生徒だった。

　特に仲の良い友達がいるわけでもなく、部活に入っているわけでもない。

　これから先の人生も今までと変わらず、平穏なまま終わっていくと、十代になったくらいから思っていた。

　──そんな彼女にあるとき事件が起こる。

　ある日の放課後の事だ。何気なく裏門の周りが汚れていたのが気

になったので、すぐ近くの物置小屋から掃除道具を取り出し、パッと片づけをしようとした時だった。

「──私も手伝うわ」

　澄んだ綺き麗れいな声。

　振り返ると、そこには女性の彼女から見ても素敵だと思うような女性が立っていた。

　彼女の名前はＢ子ビーコと言った。学校でも一番の美少女と言われている人物だった。

　……些さ細さいな事で、恋は始まる。

　彼女はすっかりＢ子に恋をしていた。

　Ｂ子の事は以前から噂うわさでは聞いていた。

　というか、学年の中でも知らない人はいないだろう。

　才さい色しよく兼けん備び、眉び目もく秀しゆう麗れい。

　誰もが完かん璧ぺきと言うほどの美少女だった。

　噂では入学して以来、たくさんの男子生徒が彼女に告白をし、そして断られてきたらしい。

　あの日、掃除が終わるとすぐにＢ子は帰って行ってしまったが、その日以降、廊下などですれ違うとにっこりとこちらに笑顔を向けてくれるのだった。

　彼女にとってＢ子は、初めて生身で完璧だと思う、理想の女の子だった。

彼女に近づきたい。

彼女の事をもっと知りたい。

なんて素敵な事なんだろう。

恋をするだけでこんなに日々の生活は楽しく感じる事が出来るのだ。

彼女は自分自身、こんなにも胸が躍おどる日々が来るなんて、思いもしなかった。

彼女はそれから常つね日ひ頃ごろＢ子の行動を目で追っていた。

お話をしたい！

もっとＢ子ビーコの事が知りたい!!

しかしある時、Ｂ子の様子が変化した事に気がつく。

心配になった彼女は、Ｂ子の事を追いかけて放課後の音楽室に辿り着き、Ａ弥エーヤやＣ太シータ達たちと出会った。

最初は一体何の目的のために集まっているのか分からなかったが、どうやらオカルト研究会のようなものらしいと、何回目かの時にようやく理解する。

彼女は特にオカルトのようなものに興味があったわけではなかったが、ここに居る時のＢ子はとても楽しそうだったし、何よりもＢ子と話すことができるのはここで位のものだった。

彼女は、知れば知るほどＢ子を好きになり、Ｂ子も、彼女の前では生き生きとした表情でしゃべってくれるようになっていった。

そうして彼女は、オカルト研究会のメンバーになったのだった。

そんな研究会で行っている情報交換ノート。

　その情報交換ノートに、彼女達が今、一番話題にしている都市伝説『終焉オワリノ本ホン』と『終焉シユウエンノ栞シオリ』を手に入れた、という情報が、殴り書きされている。そしてその後に書かれた文字、

　──やっぱりこの間の方法は間違ってなかったんだ！

　この間の方法。

　それは、特別な方法で行うこっくりさん。

　いや、実際のところ、やり方は良くあるこっくりさんとそう変わらない。

　Ａ３サイズくらいの紙の真ん中に鳥居を描き、その左右に「はい」「いいえ」を書く。その下に右側から並べて「あいうえお・かきくけこ……」と五十音を書き、さらに数字を１～10まで書く。

　コインは十円玉を使う。みんなで十円玉に人差し指を置き、カーテンを閉め、部屋を真っ暗にして、テレビをつけてその明りだけで行う。そしてこう唱える。

「こっくりさん、こっくりさん、もしおいでになりましたら、「はい」の位置までお進みください」

　十円玉はゆっくりと「はい」の位置まで動いていった。

「それではこっくりさん、鳥居の位置までお戻りください」

　そして、ゆっくりと鳥居の位置まで戻る十円玉。

その後は参加しているメンバーがひとりずつ質問に答えていくというものだった。

「……本当に続けるんですか？」

　彼女は唾つばをごくりと飲み込んでから、そうメンバーに問いかけた。

　オカルト研究会のメンバーは全部で４人。

　Ａ弥エーヤ、Ｂ子ビーコ、Ｃ太シータ、そして、Ｄ音デイーネというメンバーだ。

　オカルトに詳しく根暗な雰囲気のＡ弥、人当たりがよくてクラスでも人気者のＣ太、そして彼女の憧れの対象でもある、Ｂ子。

　この４人で机を囲うように座っていた。

　机の上にはこっくりさんのための紙があり、その上に置かれた十円玉には全員の人差し指が置かれていた。

「……ここまで来たんだし、やってみよう……」

　Ａ弥が彼女の質問に答えたのか、それとも独り言なのかそう続けた。

「そうだよ、きっと、大丈夫だって」

　Ｃ太が笑顔でそう言う。そしてそれにＡ弥も続けた。

「……うん、じゃあＢ子から、なにか質問して……？」

「え!?　わ、私!?　……えっと、じゃ、じゃあ、Ａ弥の今日の朝ご飯はパンですか……？」

「……なにその質問……？」

「だ、だって、そんな急に言われたって……！　しょうがないじゃない……！」

「あ、ほら、動き出したよ」

　彼女たちが指を置いている十円玉がゆっくりと動き始めた。

「……『ＮＯ』……ですね、Ａ弥さんどうなんですか？」

　彼女の質問に対して、Ａは頭をゆっくりと下げて答える。

「……うちはご飯派だからね……」

「じゃあ、合ってるんだ……」

「……でももうちょっとまともな質問しなよ……」

「……な、そ、そんな事いったって突然振るのが悪いんでしょー？」

「まぁまぁ」

　そのような感じで私達たちはそれぞれに対して質問を投げかけていく。

　そして、最後に――最後に、あんなことを……。

　とにかく、あの時のこっくりさんがきっかけで、『終焉シユウエンノ栞シオリ』が手に入った……？

　まさか、そんな……？

　彼女はそんなことあるわけがないと思いながらも、この時はまだ、少しだけワクワクするような二律背反の感情に鳥肌を立てるのだった。

そしてその日から、確実に変わった事がある。

　確かに、誰かに見られている。

　学校でも、家でも。確かに視線を感じるのだ。

　ひとりなのか、複数なのかもわからない。

　そしてさらに彼女を追いつめる事件が起こる。

　同じ研究会のメンバーである、Ｂ子ビーコが死んだ。

　原因は不明、しかし、そのあまりにも凄せい惨さんな状況は、とても事故や自殺などで片付けられるものではなかったらしい……。

「なんで!?　誰がＢ子ちゃんを……！　誰が……！」

　彼女のショックは計り知れないものだった。彼女の精神は日に日に病んでいき、ついには家から一歩も外に出られなくなってしまった。

　普段からいろいろな事に無関心で、心の冷えきった人間だと自分の事を思っていた。

　しかしＢ子が死んで初めて気付く。

　私の心にはとてつもない悪魔が潜んでいる。

　私に話しかけないで欲しい！

　お願いだから放ほっといて！

　ひとりにして！

もうひとりにしてよおおおオオおおおおお！！！！

　情緒不安定になり、少しの物音だけでもビクビクと怯おびえるようになる。

　一人きりで部屋の中に居ても感じる、何者かの視線。

「許してください許してください許してください許してください許してくださいい……！」

　彼女は独り言をブツブツと呟つぶやきながら、布団の中で一日の大半を過ごした。

　　　　＊

　またしばらくがたち、ゆらりと起き上がると、彼女は小さめの姿すがた見みの前に立った。

　月明かりが彼女を青白い光で照らす。

　鏡を見てみると、その表情はこれまでの顔ではなく、ボサボサの髪の毛に隠くまのひどいうつろな目をしていた。長年の癖で自然にあがる口角が薄気味の悪さをさらに引き立てる。

「……ふふふ、なにこれぇ……」

　彼女は自分の姿を見て、こう思ったのだった。

—こんなの、私じゃない！

彼女はＢ子ビーコに憧れていた、そしてＢ子自身になりたいとさえ思っていた。

しかし、本当の自分自身が明白になったことで、やはり自分がＢ子とはほど遠い、醜い存在であるということに気付かされたのだった。

彼女は絶望した。

自分が一体なんなのか、自分というものが分からなくなりかけていた。

自己のゲシュタルト崩壊。

操り人形を操る人形師にも糸がどこまでも続いているような感覚。

Ｂ子ビーコちゃんがいなくなったなら私なんていらない！

私は私のことなんて捨ててやる！　いらないいらないもういらない！

バリン！　バリィン！

いらないいらないもういらない！

バリン！　バリィン！

いらない

らないいらないいらないいらないいらないいらないいらないいらな
いいらないいらないいらないいらないいらないいらないいらないい
らないもういらない！！！！

「あはは!!」

彼女は手元にあったハサミを手に取ると、無我夢中で姿すがた見みを壊し始めた。

鏡の破片の一つ一つに映る自分の顔が、まるで別々の人間のように見える。

バリン！　バリィン！

手の所々に鏡の欠片かけらが刺さり、血を滴したたらせる。

それでも彼女は破壊活動をやめることをしなかった。

そしてまたしても意識を失うように眠り、次に起きてみると、虚うつろげな意識の中で、はっきりと、あるはずの無いものが見えた。

机の上にまるで最初からあるかのように置かれた『終焉オワリノ本ホン』、そして『終焉シユウエンノ栞シオリ』。

「……！」

彼女は膝ひざから崩れ落ちると、口を押さえながら、涙を流した。

「やだ、やだ、やだ、やだ、やだ、やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだあああ！」

何かが外れてしまったかのように絶叫する。

　そしてその瞬間に聞こえてくる単音の着信メロディ。

　テレテレレレーテレッレレレーテレーレレレーレレレレッテー♪

「……!!」

　携帯にメールが届いたと知らせる音。

　彼女は恐る恐るそのメールを開く。

「私メリー、今、公園の前にいるの」

「……え？」

　彼女の思考は一瞬停止してしまった。

　メールに書いてある文面は理解出来る。

　それに、その名前が何を意味しているのかも当然。

　オカルト研究会でなくても知っている、あまりにも有名な噂うわさ話ばなし。

　テレテレレレーテレッレレレーテレーレレレーレレレレッテー♪

「！」

　再び、静かになった空間を切り裂く着信メロディ。

「私メリー、今、１丁目の角にいるの」

　混乱する彼女のことなどおかまいなしに、次々に送られてくるメール。

　公園から、確実に、こちらに向かって近づいて来ている。

　なすすべも無く呆ぼう然ぜんとただ彼女の耳に、まるで陽気な死刑宣告のような音が鳴り響く。

　──ピンポーン。

「……ッ!!」

　鳴り響くチャイムの音に身体からだを強こわ張ばらせる。

　──ピンポーン。

　──ガチャ！　ガチャ!!　ガチャガチャガチャ!!

　──ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

テレテレレレーテレッレレレーテレーレレレーレレレレッテー♪

チャイム音と共に着信メロディが鳴り響く。

メールには絶望的な文字列。

「私メリー、今、家の前にいるの」

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ！

「やだあああああああああああああああ!!　やめてよ！　なんなのよ！　もうどこかにいってよ！　ゆるしてよ！　私達たちがなにしたってゆうのよおおおおおおおお！！！！！」

彼女は絶叫し、近くにあるものを闇やみ雲くもに投げた。

そのうちの何かが机の上にある『終焉オワリノ本ホン』に当たり、床に向かって落ちる。

落ちた時の衝撃で、ちょうど栞しおりの挟まれていたページが上向きに開く形になってしまった。

そこにはこう書かれていた。

《メリーさんからの電話に出るな》

「……！」

　そういえばどうなったのだろうと耳を澄ませてみると、扉を開けようとする音はいつのまにか消え去っており、しばらくの間静寂が訪れた。

　何がなんだかわからなかったが、許されたんだ、きっと開かないドアに諦あきらめて帰ってしまったんだ……。

「……ふ、ふふ……ふ……」

　安心なのか、恐怖の揺り返しなのか、彼女は泣き顔のまま笑い声を上げる。

　しかし、そんな楽観的な彼女の思考を切り裂く電子音が……

　静かになった部屋の中で響く。

　テレテレレレーテレッレレレーテレーレレレーレレレレッテー♪

　彼女は安心しきっていたのか、それとも恐怖のあまり正常な判断が出来なくなってしまていたのか……、陽気に鳴り響くその電話を取った。

　──そこから聞こえてきた声は、それはそれは優しい囁ささやき声だった。

「私メリー、今、あなたの後ろにいるの」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

*

「……」

「……」

「……」

「……コホン……こんなところでしょうか？」

　すでにこれまでの撮影で、意外な熱演を見せていたＣ奈シーナだったが今回のシーンではこれまでの撮影の比にならないほどの熱演だった。

　手についた血ち糊のりを拭ふき落としながらＣ奈は冷静な顔をして呟つぶやく。

「自分でホラー映画を見てる時は、この演技だと怖くないとか、いろいろ文句をつけてるんですが、自分の事となるとなかなか上う手まくいかないものですね……」

「い、いやいや！　十分怖かったから！　っていうか鏡をぶち壊すシーンとか、迫真過ぎたからね!?」

「ああ、あれはちょっと楽しかったですね」

「楽しかったって怖いから！」

「いやでもさっすがＣ奈！　いや本当迫真の演技だった！」

「うん～カメラマンとしても楽しかったよ～」

「……こ、こわい……よおぉ……」

こうして、今回のシーンも順調に撮影されたのだった。

　そして、しばらくの間雑談などをした後、オレはみんなにひとつの重大発表をする。

「そういえばみんなに発表があるんだ！」

「……え……な、なに……？」

「発表？」

「なんでしょうか？」

「おう、この作品なんだが、監督のオレとしてはもうすでにいい作品になることを確信している」

「あはは～気が早い～」

「そこで、オレはついこの間、申請をしてきた！」

「……申請？」

　コホンと軽く咳せき払ばらいをしてから、少しわざとらしく声を大きくして続ける。

「──夏前の文化祭で、この作品を発表する！」

「……………はあ!?　ちょっ！　マジで言ってんの!?」

　Ａ乃エーノが驚いた表情をしながらこちらに詰め寄ってくる。

「もちろんマジだ！」

「……ふ、えええ……？」

　みんな驚いているようだが、オレは構わずに続けた。

「せっかくだからさ、作るだけじゃなくて、みんなに見せた方が絶対いいものになるじゃん！　もったいないって！」

「ええ～で、でも……」

　Ａ乃はしばらくの間考えあぐねているようだったが、Ｃ奈シーナがそれを遮さえぎるようにこう言う。

「……私は、いいと思いますよ」

　今日の演技を見ても明らかだが、Ｃ奈はこの映画に対してちゃんと気合いを入れてくれている。それこそ、どこに出したっておかしくないってほどの気持ちで向かっていてくれたのだろう。

「さっすがＣ奈」

「Ｅ記イーキさんのいうとおり、せっかくですし、目標があった方が楽しいでしょうし」

「ん～俺も賛成かな～特に文化祭で他にやることなさそうだしね～」

　既に撮影を終えている二人が同意したところで、Ｂ香ビーカの方に顔を向ける。

「Ｂ香はどうだ？」

「……あ、ボ、ボクも……が、が……がんばる……！」

　オレはこのやり取りにちょっとした既視感を覚えながらも、Ａ乃の方を向き直す。

　Ａ乃はまたしても大げさに溜ため息いきをつきながら、困ったような笑顔で答えるのだった。

「……わかったわよ！　どうせ言い出したら聞かないんでしょ？」

「そうこなくっちゃ！」

「ただ、せっかくやるんだったら、恥ずかしくないものをつくるからね！」

「当然！」

　こうして、オレ達たちは夏前の文化祭に作った映画を発表するという目標を打ち立てた。

　映画制作をはじめてみると、楽しいとは思っていたが、それでも思った以上に面白くて、オレ達はすっかり夢中になっていた。

　早く完成品を見たいという気持ちと、この楽しい時間を終わらせたくないと思う、相反した感情。

　それでも、オレ達はエンドロールに向けて、一歩一歩歩き続けるのだった。

　その先に、どんな未来が待ち受けているかなんて、知りもしないまま。

CHAPTER4
気まぐれな憧憬。

気まぐれな憧憬。Ｉ　容疑者Ａの声明ー

　いよいよ後半戦、今週はいよいよＢ香ビーカの撮影に入ることになった。

　Ｂ香の撮影はこれまでと違い、外のシーンなどを多く撮影することになっている。

　Ｂ香の担当する都市伝説は『ドッペルゲンガー』。

　ドイツ語で、「二重の歩く者」という意味で、言葉の通り、特定の人物が同時刻に全く別の場所で現れる……ようはニセモノが出てくるという超常現象の事だ。

　Ｃ奈シーナが言うには、この超常現象は全世界各地で目撃談が語られている、有名なものなんだそうだ。リンカーンや、芥あくた川がわ龍りゅう之の介すけも目撃したなんて言われているらしい。

　よく言われる補足情報としては、ニセモノは本人に関係がある場所で目撃される、ニセモノは周囲の人間とは一切会話をしない……そして、本人がニセモノと出会うと……本人が殺されてしまうというものだそうだ。

　誰がどう見ても裏うら表おもての無いＢ香には不釣り合いな都市伝説だった。

　Ｂ香、ことＡ弥エーヤの担当する話の内容はこのような感じだ。

　彼はオカルト研究会のメンバーの一人。

『終焉オワリノ本ホン』、そして『終焉シユウエンノ栞シオリ』を手に入れたという事が、情報交換ノートに書かれていたところか

ら、彼もまた、不思議な出来事に巻き込まれて行く。

彼の性格を一言でいうと、「根暗」。

いつも決して誰とも目を合わせないように、うつむきがちに歩いている。

水たまりに反射する彼は、ひどいクマに、ボサボサの頭。丁寧にアイロンがけされた制服と相まって、頭部の見み栄ばえがより一層陰湿なもののようだった。

つまらない、この世の中は、この日常は、まったくもってつまらない。

このつまらない世界を誰かがどうか、壊してくれないか。

━━彼は今日もそう、呪文のように思いながら、学校へと歩みを進めていた。

そんな彼にとって、唯一ともいえる趣味があった。

それが、「噂うわさ話ばなし」だ。

彼は自らが作りあげたあらぬ噂をたて、興味本位に動かされた大衆たちの話の膨ぼう張ちようを、文字通り傍ぼう聴ちようする。

自分の作る物語が、まったく違う形で世間に影響を与え、僕の考え通りにことが進むのは実に楽しい。

現実は舞台だと言った偉人がいたようだけど、彼はさながら脚本家のようだった。

人の物語にその人だけの悲劇を、観客にとっての喜劇を演出す

る。

　その様相がたまらなく好きだった。

　結局、すべての噂話なんて、嘘うそを本当に変える幻想に過ぎない。

　この世の中で真実と嘘なんてものが誰にわかるだろうか？

　あるのは、「真実っぽい」ものと、「嘘っぽい」ものだけなのだ。

　噂話は、その境界線上をゆらゆらと揺蕩たゆたう。

　だから人は噂が好きだ。そして、彼も噂が好きだった。

　そもそも彼が「噂話」を好きになったのは、オカルトの類たぐいの話がきっかけだった。

　あり得ないような話を、みんなが「本当なのでは？」と信じ、怖がっているのがどうにも滑稽で、かつ興味を引いたのだった。

　そんな彼が「オカルト研究会」に入るのは、ごく自然な流れだった。

　オカルト研究会のメンバーは一見バラバラでまとまりがなく、彼とは相あい容いれないような人間だが、ひとつだけ共通点がある。

　――それは、彼らもまた、極度の噂話好きだということだった。

　やれ「口裂け女」だの、「人面犬」だの……。

　そういった噂話を語り合ってるうちに、この音楽室へと集まるよ

うになった。

　基本的にはただ単に集まって話すだけ。

　日にちが決められているわけでも、ノルマがあるわけでもない。

　メンバーの中には幼おさな馴な染じみのＣ太シータもいるが、普段から特別に仲がいいわけでもなんでもなく集まるというのは、周りからすると気味が悪いと思われるかもしれない。

　しかし、少なくとも彼にとってみれば自分の話を建前でも無く興味を持って聞いてくれて、かつそれ以外への余計な関心がない分、居心地が良かった。

　そんな研究会で行っている情報交換ノート。

　このノートには、例えば学校の噂うわさで聞いただったり、雑誌で見ただったり、テレビでやっていたことなどを情報交換として書いて共有する。

　交流があるわけではないのだが、いわゆる交換日記のようなものだ。

　彼にとっては自分の知識を忘れないようにまとめるくらいの気持ちだった。

　その情報交換ノートに、彼らの間で今、一番話題になっている都市伝説『終焉オワリノ本ホン』と『終焉シユウエンノ栞シオリ』を手に入れた、という情報が、殴り書きされていた。

　そして最後に、

　━やっぱりこの間の方法は間違ってなかったんだ！

　という文字が書かれている。

この間の方法。

それは、特別な方法で行うこっくりさんの事だ。

学校で噂になっていた、『終焉ノ栞』を手に入れることが出来るという方法をちょうど先週、オカルト研究会のメンバーで試してみたのだ。

結論からいうと、あれは「失敗」だった。

ただ、あまりにも不気味な儀式だったので、思い出すだけでも背筋が凍る。

しかし、それで手に入った？　まさか……？

そして彼はその情報交換ノートの一つの違和感に気が付き、ただ一言、そのノートにコメントを書き込むと、その日はＢ子ビーコの机の中にノートを入れて帰宅した。

しかし、その日から、彼の周りで怪奇が起こるようになるのだった……。

*

今日は撮影の前半、Ｂ香ビーカが体育で走っているシーンを撮影することになった。

授業中の生徒達たちが本人がここに居ることを証明してくれているにも拘かかわらず、他の場所で知り合いが目撃したというシーンを撮るためであった。

オレは放課後、部活動に勤しむ陸上部の部員の友人にそのことを話し、了承を得てグラウンドを使わせてもらうことになっていた。

「おっし！　さあＢ香！　走るんだ！」

「……え、あ、あのぉ……」

　現在、Ｂ香は学校指定のジャージを着用している。

　おっとりとした性格の割りに、実は運動神経もそこそこ良い……という漫画のような設定はなく、見た目通りにＢ香は運動が得意ではない。

「……ほ、ほんとに走るの……？」

「あたりまえだろ！　いい映画を撮るためだぞ！」

「……う、うん……」

　そしてトコトコと走り始めるＢ香。

　…………………遅い……これは遅過ぎる……。

　運動嫌いだというのは知っていたが、こうやってじっくりと見てみると、明らかに運動音痴だということが丸わかりだ。

「だめだＢ香！　もっと気合いを入れるんだ！」

「……えぇ～……う、うん～……」

　もう既に息切れしている。

　しかし走り方からなににしても本当にＢ香は乙女力が強い。

　男子高校生なのに毛の一つも生えていない綺き麗れい過ぎる足をしているし、肌の色も輝くように白いときたもんだ。

これはダメだ、友人として、しっかりとした男に、いや、漢おとこにしなければ……！

「そんなことで甲子園に行けると思ってるのか！　手を振るんだ、手を！」

「……え、ええ～……？」

「あの夕ゆう陽ひの見える丘で約束しただろう!?　お前を甲子園に行ける選手にしてやるって！　こんなところでへこたれている──」

　パコン！

「何が甲子園よ！」

　調子が出てきたところだったというのに、Ａ乃エーノに台本で頭を叩たたかれてしまった。

「走ってるんならせめて陸上部でしょうが！　国体とかいいなさいよ！」

「ぐ……！　確かに……！」

「怒るところはそこなんですね……」

　Ｃ奈シーナも呆あきれた顔で会話に参加してきた。

　ちなみにその間もＢ香ビーカは頑張って走っている。健気けなげなやつだ。

　オレはＢ香のためにも（？）まだまだビシバシとしごいてやろうと思っていたが、Ｄ介デイースケにも確認すると、走っているというカットのためだけだったので、映像としてはもう十分に撮れたということだった。

「……しょうがない、じゃあそろそろ──」

「━━あっ！」

　一瞬視線を外し、再度グラウンドの方を向くと、そこには何もないところで転こけるＢ香の姿があった。

　ドジッ子か！

「おいおい～Ｂ香大丈夫か？」

　オレは笑いながら近づいて行く。

「……え、えへへ……ひ、久しぶりに走ったから……」

　Ｂ香は地面に座り込んでいたが、特に怪け我ががあるわけでは無いようだったので安心する。

　しかし念のためジロジロと足を確認しようとしたところで、奇妙なものを発見する。

　Ｂ香の足の付け根に、大きな傷跡があったのだ。

　もちろん今ついた傷ではなく、昔からある傷のようだった。

「あれ？　そんな傷あったっけ？」

「……あ、こ、これ……」

　Ｂ香ビーカは恥ずかしいのか、その傷をすぐに隠すように座り直した。

　オレはその傷を見て、単純にこんな感想を持ったのだった。

「かっけえじゃん！」

「……え？」

「いや、なんか、映画に出て来る選ばれし者の証あかしみたいな感じでかっけえよ！」

「……そ、そうか……な……」

「おう！　ほら、なんていうの、傷は男の勲章というか……？　体にこういう傷がある奴やつは実は伝説の勇者で的なやつとかさ！」

　オレはまずいものを見てしまって誤魔化そうというよりも、本心からそう思っていた。

　大きな傷って……なんかいいよな！

　しかも見えづらいところにあるというのが……またいい！

「とにかく、まあ今日はこれでオッケーだから、ほら」

　そういって手を差し出す。

　Ｂ香ビーカはモジモジしながらオレの手を握り返し、立ち上がった。

「……あ、ありが……とう……」

「ん！」

「お～い～平気か～」

「ちょっとＢ香大丈夫!?」

　少しだけ遅れてＤ介デイースケやＡ乃エーノ、Ｃ奈シーナ達たちもやってくる。

「とりあえず今日はこれで撮影終了だから、みんなで帰ろうぜ～」

「まったく、自己中なんだから！　Ｂ香くん平気？」

「う、うん、大丈夫……」

　そう言って、てへへという表情を浮かべる。

　オレ達はみんなで一いつ旦たん荷物を置いている音楽室へと帰ることにした。

「……ねえ、Ｅ記イーキ……くん……」

　音楽室へと向かう途中、Ｂ香が小声でこう言った。

「ん？」

「……す、すごい……楽しいね……映画撮影……」

「おう！」

　オレは照れ臭そうに微笑ほほえむＢ香の背中を叩たたくと、ニッコリと笑い合うのだった。

　夕暮れの校舎で、チャイムの音が響き渡る。

「……この………が………ばい……に…………」

　オレはすっかりそのチャイムの音に気を取られて、誰かが呟つぶやいたその言葉に、気がつくことができなかった。

＊

　Ｂ香ビーカの撮影もついに終盤。

　今日は休日だが、メンバー全員で近くの大型スーパーのフードコートに集まっている。

　映画の中のＡ弥エーヤパートの内容は、終盤このように動き始める。

　体育の授業に出ていたにも拘かかわらず、別の場所でＡ弥を見掛けたと知り合いに言われてからというもの、同じような話を数度と聞くようになっていた。

　最初はもちろん誰かの見間違えだろうと思っていた。

　しかしその回数があまりにも多いのと、それ以上の事が起こってきたのだ。

ある日、クラスメイトが話しかけて来てこう言った。

「おーい！　Ａ弥！」

「……え？」

「なんだよ～昨日ひどかったじゃん」

　彼はひどいと言いながらも、笑いながら続けた。

「……え？」

「え？　じゃないだろ～ほら、公園の所でさ、声かけたのに、お前無視して行っちゃうんだもんさ」

　今度は……話しかけた？

「なんか心ここに有らずって感じだったじゃん？　なに？　もしかしてお腹おな痛かったとか？」

「………………」

　これはもう見間違いとかいうレベルではない。昨日は公園に行っていないし、もちろんこの目の前のクラスメイトに話しかけられた記憶もない。

　不安をよそに、そんな目撃談は日に日に増えていった。

　そして気のせいでなければ、もう一人の行動範囲は次第に、彼の家の近くへと近づいてきている。

　一日、また一日と近づいてくるニセモノ。

　そしてついにある日、近所の大型ショッピングモールに買い物に来ていた際だった。

　クラスメイトが少し先から駆け寄ってきて、不意に心をかき乱す

ような事を言う。

「あれ？　さっきあそこにいたよね？」

　突然の事に彼の顔が歪ゆがむ。

　普段しているように、笑顔を保つことが出来ない。

「……な、なんの……こと？」

「えー？　さっき屋上のガーデンに……あれ？　でもそっか、制服じゃないし……見間違いかな……？」

　誰よりも見間違いであって欲しいと思っているのは自分だ。

　しかし感覚が告げている。

　見間違いである、はずがない。

　自分のニセモノが今この瞬間、このショッピングモールの中を歩き回っているのだ！

　彼はクラスメイトに言われた言葉に、さらに精神を病んでいく。

　町の外れにある市立図書館。

　それから少し先の神社。

学校の近くの公園。

　そしてついに、自分の家の近くのショッピングモールで、しかも自分がいるこの瞬間に、目撃されたという。

　クラスメイトが嘘うそをついているとも思えない。

　このままでは、いつか鉢合わせしてしまう。

　そうなると一体どうなるというのだろう……？

　どうなるのかはわからないが、これだけは確実に言える。

　いい事が起こるわけがない。

　その先に待ち受けているのは、確実に──悲劇だ。

「……人違いじゃないかな……？　ちょっと用事あるから、じゃあ……」

「え？　あ、あ、うん」

　クラスメイトと別れると、彼はスーパーのトイレに入り、自分の顔を見つめる。

　そこにはいつもと変わらない彼の顔が映っていた。

　しかし、何かが変わってしまったのでは無いかという不安を感じる。

　こんな退屈な日常なんて、いつ壊れたって構わないと思っていた。

　でも考えてみると途端に怖くなる。

ゲームのモブキャラクターのように、同じ顔をした人間が、同じ顔でまったく別のことを言うニセモノが、今この瞬間もどこかにいる……。

　あの日、あの時、あのこっくりさんから……、自分の生活がどこか変わってしまった感覚。

　そして、明らかに不自然な、あの「情報交換ノート」の文字……。

　──一体、何が起こってるっていうんだ……。

彼は混乱し、その日は早々に家へと帰る事にする。

家へと帰る道もいつもとは変えて、何かから逃げるように逃げるように帰るのだった。

そして、家へと着くと鍵かぎを開けて階段をのぼり、二階にある自分の部屋を開けようとする。

「…………！」

その瞬間、確かに人の気配を感じるのだった。

家族？　いや、外出しているはずだし、なによりも、鍵がしまっていたじゃないか。

空き巣だとしても、あまりにも静か過ぎる。

ドア越しにも感じる、体温のような生なま温ぬるい存在感。

異世界に通じるドアを開けるような感覚。

彼は、意を決していつもより思い切りドアを開ける。

目に入り込んできたのは、自分の部屋の隅に立つ、一人の少年。

同じ学校の制服を着て、壁に向かって直立不動で立っている。

「…………ひっ！」

彼の右手には黒い表紙の、大きめで古い本が携たずさえられてい

た。

彼と同じくらいの背丈で

彼と同じくらいの髪の色で

彼と同じ目で、彼と同じ口で、彼と同じ……声で。

「──僕はだーれだ？」

結局のところ、Ａ弥エーヤは次の日も何事もなかったかのように学校に登校していた。

そして、その日以降、彼に似た人を見たという話は、一切聞かなくなったのだった。

しかし、彼はまるで人が変わったかのように明るく活発な少年になった。

人当たりが良くなり、他人にも積極的に話し掛けるようになっていた。

クラスメイトからは「人が変わったようだね」なんて言われた。

そして後日、オカルト研究会のメンバーであるＢ子ビーコ、Ｃ太シータ、Ｄ音デイーネが次々に死んだという事件が発生した。そのすぐあとから、彼も同様に行方不明になってしまっている。

しかし、彼のクラスメイトの証言によると、彼は確かにその

ニュースを聞いた時、声を堪こらえきれないというように、笑っていたという。

「……くくくくく………」

　いままでに、誰も見たこともないような表情で。

そして彼の手には、見慣れない古ぼけた本が携たずさえられていたのだそうだ……。

＊

「……」

「……」

「……」

「……あ、あのぉ……」

「あ、お、オッケー！　カット！」

　最初はぎこちなかったＢ香ビーカの演技だったが、本人と入れ替わった後のニセモノの演技を撮影するころには、慣れもあるのか、実に順調に撮影が出来ていた。

　この話ではカット割りを多用して、最初にＡ弥エーヤ本人のカットを撮影、その後に衣装も変えてドッペルゲンガーのＡ弥の撮影と、一人二役での撮影だった。

　裏うら表おもてのないＢ香が雰囲気をがらっと変える難易度の高い演技が出来るか心配だったが、いらぬお世話で、それはもう完かん璧ぺきにドッペルゲンガーのＡ弥を演じきったのだった。

「な、なんかＢ香くんがああいう表情すると……違和感あるね……」

　Ａ乃エーノも、ちょっとだけ本気で怖そうにしながらそう言った。

　確かに、こうやってみるとＢ香は意外に怒ると怖いタイプかもしれない。

「……あ、あの……ごめん、なさい……」

「あはは～いつものＢ香だ～」

Ｄ介デイースケは機材の片付けを開始しながらも、能天気にそう言う。

　Ｃ奈シーナは台本を軽くチェックしながら、「こういうちょっと後味の悪い話というのもいいですよね……ふふふ……」なんて独り言を呟つぶやいている。

　オレはＢ香の背中を軽くトンと叩たたいてから、

「Ｂ香！　バッチリだったぞ！」

　と言った。

「……あ、うん……えへへ……」

　八重歯を覗のぞかせながら笑うＢ香に、普段なら「乙女か！」なんてツッコミをいれるところだが、今日のところはなにも言わずに微笑ほほえみ返す。

　とにかく！　これで撮影もほぼ終了に近づいてきた。

　ついに明日からはラストパートになるＡ乃の撮影へと進むことになる。

「よーし！　最後まで気合い入れて行くぞー！」

　撮影はいたって順調！

　オレ達たちはさらにやる気をみなぎらせるのだった。

気まぐれな憧憬。II　□容疑者Ｂの証言ー

　今日からついにＡ乃エーノの撮影に入る。

　映画は、４つのエピソードからなるほぼ連作短編に近い形なので、このパートの撮影が終わると撮影は基本的に終了となる。

　Ａ乃の担当する都市伝説は『ひとりかくれんぼ』。

　関西の方などに伝わるらしい、あまり有名ではない話だ。

　いわゆる、こっくりさんなどと同じく、降霊術のようなものらしい。

　この都市伝説に欠かせない小道具が、ぬいぐるみだった。

　実際に儀式の際に使用するぬいぐるみのため、ファンシー過ぎてもいけないし、もともと気味が悪いようなデザインだと、あまりにもわざとらしくなってしまう。

　簡単にいうと、小道具の中でもかなり重要なポジションにあるアイテムだった。

「……というわけなんだが」

　オレはＡ乃エーノ、そしてメンバー達たちの前で神妙な面持ちでこのぬいぐるみの重要性を伝えた。

　そして、本題を切り出す。

「Ａ乃ってそもそもぬいぐるみ持ってんのか？」

　ブオン！

「うおっとおお！」

　久しぶりの右ストレートがオレの頬ほおを掠かすめる。

　いや、唐突になんなの!?

「ぬ、ぬいぐるみくらい持ってるわよ！　なにＡ乃って女なの？　くらいのテンションの質問の仕方は！」

「そ、そんなこと言ってないだろうがよー！　た、ただ……」

「た、ただってなによ……！　なに？　逆にかわいいもの持ってたら不満だって言うわけ!?　似合わないことしちゃってとか思ってるんでしょう!?　よ、余計なお世話よ！」

「いやだからそんな事言ってないって！　とにかく落ち着けよ」

　暴れるＡ乃をなんとかなだめすかして話を続ける。

「Ａ乃がぬいぐるみを持ってることは、分かった……ただ」

「……？　ただ？」

「Ａ乃だけがかわいいと思ってはいるが……実は映像的にはグロテスクになりすぎるんじゃないか……ってことはないかな？」

　一瞬の沈黙。

「……は？　どういうこと？」

　Ａ乃はオレの言葉の真意を汲くみ取とり切れていないようだった。

　これは……やはりそうだったのか……。

　ちなみに他のメンバーは静観の立場を貫いているが、おそらくはオレと同じ感情でいるだろうということがビシバシと伝わってくる。

「……よーし、じゃあもっと分かりやすく言うぞ……」

　オレは生なま唾つばをごくりと飲み込み、さらに続ける。

　これは、未開のジャングルに足を踏み入れるような、そんな冒険に満ちたチャレンジだと言っても過言ではないだろう。

「□□Ａ乃エーノのかわいいのセンス、絶対おかしいって！」

　言った、言ってしまった。

　ポカンとしたまま固まるＡ乃を見て、Ｃ奈シーナやＤ介デイースケ達たちも目を逸そらす。

　やっぱり自覚的にキモかわいい的なものを選んでるんじゃなくて、この子、かわいいとおもって「あれ」を買ってるんだ！

「え？　ごめん、ちょっと何言ってるか分からない」

「じゃあ言わせてもらう！　ずっと気になってたが、その携帯についている悪趣味なストラップは一体なんだっていうんだよ！」

　犯人はお前だ！　ぐらいなノリでＡ乃の携帯についている物体を指差す。

「え？　これ？」

Ａ乃エーノは携帯をポケットから取り出す。

　その先には、意味不明な物体が取り付けられていた。

　キノコ形のマスコットキャラクターのような……。

　それにしても見る度にむかつく顔をしていると思う。

　実は「メリーさんの電話」の時にも、Ａ乃の携帯電話を使用した。

　その時はさすがに取ってもらったのだが、Ａ乃はしきりに「あった方がいいと思うのにな～」と呟つぶやいていたのだった。

「これは『やる気への木』さんだよ？」

「やる気……エノキ？」

「あ、ちがうちがう、『やる気』は普通のやる気で、後半は『へ』『の』『木』。最後はウッドの『木』であとはひらがな」

　……どうみてもエノキなのに……理不尽だ……。

「いや、それはどうでもいいんだけど、Ａ乃、これのこと……どう思ってる？」

「……え？　普通にかわいいじゃん！」

　Ｃ奈シーナが見かねたのか、さすがに口を挟んでくる。

「いいえ、一切かわいくはないと思います」

「え!?」

　Ａ乃はようやく自分が置かれている状況が分かってきたのか、他のメンバーの顔を交互に見る。

「………あ…あはは……」

Ｂ香ビーカも苦笑いしか浮かべられないようだ。

「……」

　Ｄ介ディースケはもはや我関せずという感じでビデオカメラを調整している。

「……え？　え？　マジ？　こんなかわいいのに⁉」

　本格的にショックを受けているようだった。

「……やっぱりお前ってなんかちょっと変だよな。レトロゲーム好きだったりとかさ」

「ゲ、ゲームは……いいじゃない……！」

　Ａ乃はショックを受けているのか、いつものキレが感じられない返答だった。

　Ａ乃エーノはそれでも納得いかないという感じだったが、撮影の時はかわいいにしても変にしても、画面的には緊張感が無くなるからという提案をしぶしぶ了承するのだった。

　とにかくそんなこんなで、映画で使用するぬいぐるみはＢ香ビーカが幼いころに家庭科の授業で作ったというウサギのぬいぐるみを使用する事にした。

　Ｂ香も小さい頃は年とし相そう応おうに不器用だったのが分かる、少し不気味な出来だ。

　Ａ乃、ことＢ子ビーコの担当する話の内容はこのような感じだ。

　彼女もまた、オカルト研究会のメンバーの一人。

　彼女は学校でも有名な美少女だった。眉び目もく秀しゅう麗れい

才さい色しよく兼けん備び。将来有望な人格者。

　しかし、実はその顔は彼女が作り上げた完全な『ニセモノ』。

　幼少の頃、親の都合で転勤が多かった事も理由のひとつだろう。

　敵を作らず、目立ちすぎず、かといって暗いとも言われず……。

　人にいかに好きになってもらえるか、そして、いかに敵を作らないか……彼女はそればかりを考える子供だった。

　いつしか彼女は、人に囲まれれば囲まれるほど、孤独感を感じるようになっていた。

　しかしある日、そんな彼女にイレギュラーが起こる。

　その完かん璧ぺきな仮面に、Ａ弥エーヤという同級生が気付いたのだ。

　彼女は何度かＡ弥を問い詰める内に、何故かオカルト研究会の活動に参加するようになっていく。

　そうして歪な形で始まった会への参加だが、彼女は一つの意外なことに気が付く。

　自分はどうやら「オカルト」の類の話が好きなようだった。

　人生において何かに熱中するという事がなかった彼女だが、オカルト話を聞いていると胸の奥がワクワクとうずくのを感じていた。

　そんな研究会で行っている情報交換ノート。

　その情報交換ノートに、学校でも今、一番噂うわさになっている都市伝説『終焉オワリノ本ホン』と『終焉シユウエンノ栞シオリ』を手に入れた、という情報が、殴り書きされている。そしてそこに書かれた、

　━やっぱりこの間の方法は間違ってなかったんだ！

という文字を見つけたところから、彼女もまた、不思議な出来事に巻き込まれて行くことになる。

　この情報交換ノートは、Ａ弥エーヤ→Ｂ子ビーコ→Ｃ太シータ→Ｄ音デイーネの順番に回ってくる。

　回すペースはまちまちで、早い時は早いし、遅い時は遅い。

　なんとなくそれぞれの机の中にノートを入れておくのだが、回す順番だけは変わったことがなかった。

　しかし、今回は、おかしなことがあった。

　彼女の書き込みの前、つまりＡ弥の書き込みには、こう書かれている。

　──この書き込み、誰？　Ａ弥

　普段は書き込みの最後に名前なんて入れないものの、今回は不審がったＡ弥があえて署名をしている。

　もしＡ弥の前の人間が書き込んだのなら、Ｄ音のはずだが、１周さかのぼってみればわかるが、Ｄ音はその前にすでに書き込みを終えていることが文字を見てもわかる。

　──やっぱりこの間の方法は間違ってなかったんだ！

『終焉オワリノ本ホン』『終焉シユウエンノ栞シオリ』を手に入れ、この書き込みをしたのはメンバー以外の人間……？

　何か底知れない不安感を感じながらも、彼女もひとこと「私じゃないよ？　Ｂ子」と書いてから、Ｃ太の机の中にノートをすべり込ませておいた。

　そして、この間の方法とは、特別な方法で行うこっくりさんのこと。

　いや、実際のところ、やり方は良くあるこっくりさんとそう変わらない。

　Ａ３サイズくらいの紙の真ん中に鳥居を描き、その左右に「はい」「いいえ」を書く。その下に右側から並べて「あいうえお・かきくけこ……」と五十音を書き、さらに数字を１～10まで書く。

　コインは十円玉を使う。みんなで十円玉に人差し指を置き、カーテンを閉め、部屋を真っ暗にして、テレビをつけてその明りだけで行う。そしてこう唱える。

「こっくりさん、こっくりさん、もしおいでになりましたら、『はい』の位置までお進みください」

　十円玉はゆっくりと「はい」の位置まで動いていった。

「それではこっくりさん、鳥居の位置までお戻りください」

　そして、ゆっくりと鳥居の位置まで戻る十円玉。

その後は参加しているメンバーがひとりずつ質問に答えていく。

そして、最後に、普通なら「こっくりさん、こっくりさん、どうかお戻りください」という質問をして、「はい」の位置に十円玉が移動したら「ありがとうございました」と礼をして終了する。

―しかし、ここからが噂うわさで言われている禁断の方法だった。

彼女達たちは、再度、最初からこっくりさんをやり直す。

これは、こっくりさんは全員が経験者の方が成功率が増すと言われているためだ。

質問はほぼ同じような質問で構わない。

同じように質問を一人一人回して行く。

そして、最後に、「こっくりさんでは答えることができない質問をする」。

例えば、この場所に居ない人物を、この場所に居るものとして質問を出す。

そもそもの内容自体が矛む盾じゆんしている質問に対して、こっくりさんは怒りを露あらわにする。

十円玉はゆっくりと動き……、

「し」

「ね」

　と文字を指す。

　それでもさらに質問を続ける。

　この世にあるはずのない、『終焉オワリノ本ホン』『終焉シユウエンノ栞シオリ』を寄よ越こせと命令をする。

　十円玉はゆっくりと動き、

「こ」

「ろ」

「す」

　と文字を指す。

　これだけで、彼女達たちはもう泣いてしまいそうなほどの恐怖に奥歯がガタガタと震え、鳥肌が立ち、心臓は紙ヤスリで削られるように寒気を感じていた。

　それでも、最後の最後に、Ａ弥エーヤが噂うわさ通りにこう言うのだった。

「…………もういいよ、役立たずの動物霊が、帰れよ」

N O

帰る事を拒否してくるこっくりさんに対し、その場で十円玉を投げ落とし、あろうことか降霊術の途中で用意した用紙を破り捨てる。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

本来なら絶対にやってはいけない行為。

あの世から呼び寄せたこっくりさんが、この世に残ってしまい、近くにいる自分たちに取とり憑ついてしまうと言われている。

しばらくの静寂。

この後、何かが起こるのではと体を固くして身構えるが、時間が経たってもなにも起こることはなかった。

ほ、ほら、大丈夫、これで……終わりだと誰かが呟つぶやく。

取り返しのつかないことをしてしまった気持ちになりながらも、今日は帰ろうという声に促うながされるように、メンバーは教室を後にするのだった。

*

しかしその日から、彼女は常に誰かに見られているかのような感覚を味わうようになる。

部屋に帰ってからも、朝起きる時も、常に見られているような、体の一部がチリチリするような感覚。

そして、回ってきた正体不明な「情報交換ノート」。

彼女の周りの変異はそれだけでは止まらなかった。

かなり早い段階で精神的にやられた彼女は、次の日、学校を休むことにする。

しかし、休んでみるとそれは失策だったことに気がついた。

クラスメイトに話しかけられることは、正直今の精神状態ではうざったいとしか思えなかったのだが、こうやって家で一人になると、さらに恐怖心があおられる。

学校に行けばよかった。

Ａ弥エーヤやＣ太シータ、Ｄ音デイーネ達たちと話をすればよかった。

あの書き込みが誰のものか、真偽を確かめるだけでも余計な不安が消えたかもしれないのに……！

彼女はこれからでも遅くないのではないかと包くるまっていた布団から抜け出す。

しかし、そんな彼女をさらに絶望に叩たたき落おとすような現実が、目もく前ぜんに広がる。

机の上に、見慣れぬ黒い本。

『終焉オワリノ本ホン』と『終焉シユウエンノ栞シオリ』。

「……やだ……なんで……？　なんで私のとこ……！」

　こっくりさんをした時の、あの、なんとも言語化できない恐怖が再び彼女を襲う。

　彼女は取り乱し、何の解決にもならない事を理解しながらも泣き崩れてしまった。

「し」

「ね」

　あの時の光景が頭から離れない。

　今も網膜の裏に焼き付いてしまったかのようにイメージが拭ぬぐえず、聞こえるはずのない声で彼女の鼓膜を揺らす低い声がリフレインする。

「こ」

「ろ」

「す」

「やめてやめてやめてやめてやめてえええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」

　行き場のない感情を抑えきれなくなった彼女は目をつぶり、耳を塞ふさぎながら絶叫する。

この行為に意味なんてなくても、一瞬の気休めになれば、それでいい。

　それから一体どれくらいの時間が経ったのだろう、彼女はもう泣く事も出来ないほどに心をすり減らしてしまっていた。

　何度見ても机の上には黒い本が置かれている。

　しかし、その上にはよく見てみると真っ白な紙に書かれた手紙が置いてあった。

　彼女は無表情なままそれを手に取ってみる。

　──手紙には《ひとりかくれんぼをしろ》とだけ書かれていた。

　彼女はその手紙を手にしたまま、しばらくの間動けなくなってしまった。

　それは、もしかしたら数秒だったかもしれないし、十数分の間だったかもしれない。

　カーテンも閉じられた部屋の中、思考すらしていないと、時間感覚もおかしくなってしまったらしい。

　次第に意識がはっきりとしてくるのと同時に、時計の秒針の音が大きく聞こえてきた。

　やらなかったら一体どうなってしまうのだろう、そして、やったらどうなってしまうのだろう。いろいろな考えが頭に浮かんだが、もう彼女にとってはどうでもよくなってしまったのかもしれない。

「これを成功させないと、私……殺される……」

　彼女は静かにそう呟つぶやくと、ゆっくりと立ち上がり、テキパキとひとりかくれんぼの準備をはじめたのだった。

　　　＊

　まずは、手足があるぬいぐるみを用意せよ。これは、彼女が小さい頃に買ってもらった、うさぎのぬいぐるみを使用した。

　次に、お米を用意する。

　台所に行ったが家族はいない。書き置きと共に、ご飯が用意されていた。

　またしても、背後からは視線を感じる。

　これまでよりも強烈な、感情の籠こもった視線。

「……また……」

　そのまま台所で塩水を作りコップに用意すると、二階にある両親の寝室へと向かった。

　そして、縫い針と赤い糸、ハサミとカッターナイフを手に入れる。

　これからは、ひとりかくれんぼを始める前の段階に入る。

ぬいぐるみの腹を切り割き、綿を取りだす作業。

　彼女は手を大きく振り上げると、一気にぬいぐるみに向かってハサミを振り下ろした。

　──ザクッ。

　何かに取とり憑つかれたかのように何度も何度もハサミを突き立てる。

　何度も何度も何度も何度も。

　一息つき、詰め物を取り出すと、詰め物の代わりにお米と自分の爪つめを切って入れ縫い合わせる。

　ぬいぐるみの手や足、口にも赤い糸を縫い合わせてみるが、見た目だけで、とてもグロテスクなものに見えてくる。

「まるで、血管みたい……」

　彼女はそう呟つぶやくと、次に、塩水を持ったまま、襖ふすまの奥にそれを持って行った。

　これは、隠れる場所に置いておくものらしい。

「あとは、ぬいぐるみの名前ね……」

　少しだけ考えてから、彼女はＡ弥エーヤという名前をつけることにした。

「……さて、はじめなきゃ……」

　彼女は家中の電気を全すべて消し、家中のカーテンを閉め、テレビだけをつけた。

「最初の鬼はＢ子ビーコだから。最初の鬼はＢ子だから。最初の鬼はＢ子だから──」

　無表情のままそう呟つぶやくと、浴槽に行き、風ふ呂ろ桶おけの中にぬいぐるみを沈めた。

　水が暗くら闇やみの中の僅わずかな光を反射させて、まるで生きているかのようにぬいぐるみの表情を歪ゆがめた。

　そして、台所へと戻ると、出しておいたカッターナイフを手にとって、目をつぶり十秒程数える。

「もういいかい？」

　そう言うと、風ふ呂ろ場ばへと行って、桶おけを開け、ぬいぐるみを取りだし。

　──腹を刺す。

「次はＡ弥エーヤが鬼の番。次はＡ弥が鬼の番。次はＡ弥が鬼の番……」

彼女はそう言いながら腹を刺すと、一度台所へと戻りカッターナイフを置いた後、塩水を置いておいた襖ふすまの部屋へと戻った。

襖の奥に入りしばらくの間じっとして考えを巡らせる。

『終焉オワリノ本ホン』『終焉シユウエンノ栞シオリ』の正体とは一体なんだったのだろうか……。

彼女は見逃してはいけない何かを見逃しているような感覚に陥る。

喉のどの奥に突っかかった何かがもう少しで言語化しそうなところにまで来ていた。

何かが、何かが、何かがおかしい……？

一体……？

そもそも、あの書き込みは一体誰が書いたというのだろう。

オカルト研究会のメンバー以外に、一体誰があのノートを見たりする？

私にもし力があれば……、力さえあれば、すべてが解決出来たかもしれないのに……！

しかし、彼女のそんな思考を遮さえぎるかのように、聞こえるべきではない音が廊下に響く。

ギッ。ギッ。

誰もいないはずの廊下に聞こえる足音。

「……！」

彼女は息を殺して身を潜める。

足音は階段を昇り、次第に次第に近くなって来ているようだった。

ギッ。ギッ。ポタ。ポタ。

何かが垂れる音が聞こえる。

彼女は耳を塞ふさぎ、気配が遠くなっていくのをただひたすら震えながら待っていた。

それから一体、どれくらいの時間が経たったのだろう。

それは数時間程かも、それとも、数秒のことだったかもしれない。

おそるおそる襖ふすまの隙すき間まから覗のぞくと、そこに、あるはずのない物を見ることになった。

『──みーつけた』

「きゃあああああああああああああああああああああ！」

　　　＊

「……」

「……」

「……」

「……う、うん……」

　絶叫を終えたＡ乃エーノが咳せき払ばらいをしてこちらを向く。

　これまでのみんなもそうだが、Ａ乃の演技はさらに一回りも上の迫力があった。

「すげえ……」

「……うん……すごい」

「……Ａ乃さん、とっても素敵でしたよ」

「さっすがＡ乃～」

　みんなが口々に賞賛の声を上げる。

　オレもＡ乃のもとに駆け寄っていく。

「冗談無しで、すごかった。引き込まれた！」

「ちょ、ちょっとやめてよ！　は、恥ずかしいでしょ……！」

「いやマジで、お前、演技とか出来るのな！」

「で、できない、けど……足……引っ張れないし……」

「Ａ乃さんは、私にもおすすめの映画を貸してって最近特に勉強熱心でしたもんね」

　Ｃ奈シーナが微笑ほほえみながら話しかけてくる。

「いや～本当、カメラ越しでもすっごかったよ～あとでチェックするのが楽しみ」

「……うん、怖かったけど……かっこ、よかった、です……！」

「ちょ、もう！　いいかげんにして……！」

　Ａ乃は耳まで赤く染め、照れ隠しをしている。

「でもＡ乃エーノさん……そろそろ着替えた方がいいかもですね」

　Ｃ奈シーナの言葉でＡ乃はようやく自分の状況を確認する。

　よく見てみると、お風ふ呂ろ場ばにぬいぐるみを沈めるシーンだったりもろもろで水に濡ぬれてしまっていたのだ。

　若干服が張り付いて、Ａ乃の引き締まった体のラインを際立たせている。

「……！」

　視線をあげたＡ乃と目が合う。

　オレはすぐに殴られるもしくは目つぶしにあう、のどちらかを覚悟したが、しばらくしても衝撃が来なかったので目を開けてみると、そこに今まで見た事がないような表情をするＡ乃を見るのだっ

た。

「……！　み、見た……!?」

　Ａ乃が赤面している……だと!?

　オレまで普段とは明らかに違うＡ乃の反応にどぎまぎしてしまう。

「い、いや？　な、なんのこと？」

「そ、そそ、そうだよね？　とりあえず着替えてくるね」

「お、おう～！」

　なんだか調子が狂ってしまう。

　Ａ乃はそのまま別の部屋に入った。

　風邪を引いたりしてもいけないので、着替えた方がいいだろう、うん、そうだそうだ。

　オレひとりだけしばらくドアの前で立ち尽くし、変な感じになっているなか、Ｄ介デイースケ達たちは早々に片付けやらで一階に降りていた。

　しかし、オレもいい加減後を追いかけようとしたその瞬間、Ａ乃の部屋の中から悲鳴が聞こえてきたのだった。

「……きゃ！」

「……!?」

オレはすぐにＡ乃エーノの部屋のドアを開く。

　もしかしたら、映画の撮影がきっかけで、本当の怪異に巻き込まれてしまったのではないか……！　一瞬で頭の中に浮かんでは消えて行く悪い結末。

　まさか！　そんな事……！

　──ガチャ！

「……Ａ……………乃!?」

　そこには、オレの頭の中に一瞬で浮かんだ全すべての悪い事よりも数倍も悪い……いや、都合が悪い、ありえない光景が広がっていた。

「……え？　ええ!?」

「あ、いや、これはその、ちがうんだ……！」

　Ａ乃は着替えの真っ最中、まさに、スカートを穿はこうとしているところだった。

「きゃあああああああああああああああ！　死ね！　死んでコンティニューするなあああああ！」

「おうふ！」

　Ａ乃エーノは電光石火のスピードでオレの事を殴ると、そのままドアを閉めた。

　オレが最後に思ったことは、ああ、スパッツ穿はいてても薄いやつならパンツって透けるんだなあってことくらいだった。

　ちなみに後々聞いた話によると、Ａ乃が悲鳴を上げたのは部屋の中に虫が出たからだそうだ。しかも、それも勘違いだとか……。

　オレはいつもと違ってちょっとしおらしい感じのＡ乃いけるじゃん!?　と思っていたのだが、そんなことはなかった。

　結局Ａ乃はいつもと変わらないし、そんなラブコメみたいなベタな展開はオレ達たち５人には似合わないのだなんて笑えてしまう。

　とにかく、そんなこんなでメインパートの撮影は終了！

　これからは編集や演出へと移ることになる。

　オレ達はすでにやりきった感覚に陥っていたが、これからさらに、あんな事件が起こることになるとは、思いもしなかったのだった。

CHAPTER5
終末-Re:write-

撮影を終えたオレ達たちは、その後も定期的に音楽室に集まりながら、編集などの作業を一緒に進めていた。

　一緒に進めるといっても、実質的な作業は専門的な知識を持っているＤ介デイースケとＣ奈シーナに任せていたが、テイクを選ぶ作業であったり、演出の相談などをしながら一緒に作り上げていく感覚は撮影とは違う感覚で面白かった。

「そういえばさ」

　編集についてＣ奈やＤ介と議論をしていると、Ａ乃エーノが手持ち無ぶ沙さ汰たに話しかけてきた。

「結局のところ、この作品のオチってどうなってるの？」

「あー……」

　いつもなら大げさに胸を張って「決まってない！」からの殴られるパターンだが、今回については正直に話す事にする。

「実は、そこまではまだ考えてないんだ」

　Ａ乃はそれに対して「はあ!?」と怒りそうなものだが、そういうこともなく、「ふーん、そうなんだね」と答えた。

　そんな様子を見て、Ｃ奈が横から口を挟む。

「実は、私もそこについては意見を言わせてもらったんですが、今回はホラーシーンが撮りたいってことを優先させてもらったので……」

「うん～俺も同意見だったしね～」

　なんとなく、オレの事をフォローしようとしてくれているのを感

じる。

　だからオレはあえて明るい声でこう言う。

「最終的にはさ、オチなんてなくったっていいんじゃねって思うし、もしどうしても納得いかなかったらさ……また続きを撮ればいいんじゃん？」

　オレはニッコリとわらう。

　Ａ乃も、他のみんなも、なにも言わなかったが、その意見には同調してくれているという雰囲気を感じた。

　とにかく、まずはこの作品を完成させよう。

＊

　文化祭に向けて順調に見えたが、ここでひとつの問題が発生することになる。

　制作上は特に問題なくやっているのだが、肝心の申請が通らなかったのだ。

　こちらが出した申請は以下の通り。

　・音楽室にて、自主制作映画上映会。

　これにはいくつかの問題が絡んでいることがわかった。

　映画研究会はそもそも学校的には正式に活動している部活と言っていいのか微妙な立ち位置であり、かつ部室も、勝手に音楽室を

使っているだけに過ぎない。

　ちなみに、吹奏楽部は講堂を開放してもらってそこで部活動を行っているので、音楽室は今はほとんど使われていない。

　使われてないならいいじゃないか！　と言いたいところだが、そんな意見が通らないのは理解した。

「くっそ～！　どうすりゃいいかな……！」

「もー！　ホント行き当たりばったりなんだから！」

「いや、だってほとんどこの教室使ってないじゃんか、内容も映画上映だしするっとＯＫもらえると思うだろ普通～！」

「……お、おちついて……くださ、いぃ……」

「あはは～こまったね～」

「まあ、いろいろ交渉していくしかないですよね」

　今オレ達たちは学校の屋上へと続く階段の踊り場で、作戦会議をしているところだった。

「とりあえず、問題は二つあるわけです」

　Ｃ奈シーナが眼鏡をくいっとあげながら続けた。おお、女教師っぽい。

「映画研究会が、正式な活動をしていると認定されること、また、この音楽室を正式に使用する許可をもらうこと」

「うんうん」

「これらを解消するには、ひとり、教師を仲間にすることが必要です」

「……教師？」

「私達たちはそもそも正式な部活として登録されているはずですし、活動基準も満たしています。なので学校側に部活として活動し

ていることを印象づけて、さらに教室を使用できるようにしてもらわないといけないわけですから、その交渉をしてくれる人が必要です」

「ああ～……っても誰もでいいわけじゃないよな？」

「はい。一応いるじゃないですか、顧問が」

「ああ～……そうだな……」

　顧問がちゃんとオレ達は活動していますと学校側に認めさせて、さらに文化祭の教室案分の交渉をすれば問題ないはずなのだ。今回はしょうがない、奴やつの力を借りに行こう。

*

「ん、わかった」

「……ホ、ホントに大丈夫ですか？」

　目の前には無ぶ精しよう髭ひげで、髪も整えていないのかボサボサなままの男性教諭がいる。

　彼は現在の映画研究会の一応の顧問である。

　そもそもは違う先生がやっていたのだが、その先生が定年を迎えられる際に形式上引き継ぎ、そのまま廃部にするか～という流れだったところを、その話を聞いたオレが半ば無む理り矢や理り継続させたという経緯である。

　この先生はなんというか、適当なところが美点でもあり汚点でもある人なので、少しだけ信用することが出来なかった。

「まかせとけって」

「ええ～でも先生、基本適当じゃないですか～……」

　Ａ乃エーノが辛しん辣らつな意見をストレートにぶつける。

一応今の状況としては、音楽室に先生を呼びつけ、オレ達が撮影している映画の一部、編集が終わったものを見せ終わったところだった。

「私達、どうしてもこの作品を上映させたいんです」

「うん、お願いします」

「……お、お願い……します……」

　Ｃ奈シーナ達も後に続けて頭を下げる。

「まかせとけって、なんとかするよ」

「だから！　軽すぎて不安なんですって！　オレ達本気で……！」

　オレ達の必死のお願いを聞いても、先生はずっとへらへらとした笑い顔のままだった。

「……先生！」

「Ｅ記イーキ」

　しかし突然表情を引き締めると、オレの肩に手を置いて続けた。

「そりゃオレは普段適当かもしれないけどさ、さすがに本気なものとそうじゃないのは分かるぞ？　こんだけちゃんとお前らががんばってんだったら、吹奏楽部の顧問をぶん殴ってでもこの部屋とって来てやるって」

　そう言うと、またいつものにやけ顔に戻る。

「ま、先生ケンカ弱いから、きっちり理由つけて調整するわ～」

　こんな風に言われたら、もうオレ達たちは先生の事を信用するしかない。

　……くそ。ちょっとかっこいいじゃん。

「わかりました、よろしくお願いします……！」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

全員で改めて深々と頭を下げる。

先生は「お～う」なんて言って去って行った。

＊

これで結果的に部屋使えなかったらなんか笑い話だよな、なんて話をしていると、その翌日には先生が再び部室に来て「大丈夫だったぞ～」なんて軽く言って帰って行った。

仲のいい他の先生にＡ乃エーノが聞いたところ、あの日の職員室でオレ達の顧問は、普段出さないようなハキハキとした声で「部員達ががんばってるんです！　お願いします！」と吹奏楽部の顧問に頭を下げてくれていたそうだ。

そんなこんなで急浮上した問題は、急展開を迎えすぐに解決した。

一応文化祭では時間は限られているが、音楽室をそのまま使わせてくれるのだそうだ。

なんだかこのことをきっかけに、オレ達のやる気はさらにあがっていき、編集なども含めて急ピッチで映画は完成していった。

しばらくして、ついに文化祭準備期間に入った。

Ｄ介デイースケとＣ奈シーナは協力して、最後の最後まで編集作業を行っていた。

少しでも良い作品になるように、連日頑張ってくれている。

そして、Ｂ香ビーカとＡ乃とオレは、当日の映画上映のための準備を行っていた。

「当日何やるかだよな～やっぱり、ポップコーンと飲み物はなんと

かしたい」

「あ、それなんだけど、近くの教室で喫茶店やる子に聞いたんだけどさ、飲み物とか冷やすのはあっちでも協力してくれそうだし、ポップコーンも調理必要ないお徳用みたいのあるみたいだから、なんとかなりそうー」

「お、マジか！　さすが！」

「ポップコーンはＤ介デイースケ情報だけど、あ、ちなみにＤ介、当日はポップコーン担当やりたいらしいよ」

「あ～、っていうか役割分担も決めとかなきゃだなー……」

「……そ、そうだ、ね……」

「まあ、Ｂ香ビーカは教室内の誘導係かな、Ａ乃エーノもアナウンスしつつ何かあったら教室内みてもらって、で、Ｃ奈シーナが機材関係とかのチェックって感じかなあ……」

「あれ？　Ｅ記イーキは？」

「オレは廊下で呼び込みしつつ、全体をみたり、それこそジュース補充したりって感じかなあ……あ、あと、せっかくだからアンケートとかもやりたいな」

「……あ、じゃあ、ボク……つくるよ……」

　Ｂ香がおどおどと手を挙げる。

「確かに、Ｂ香は字もきれいだし、手先も器用だもんな。なんかこうさ、せっかくだからアンケートにも凝こってもらって、上う手まく折り畳むと文字が浮かび上がってくるデザインにするとか、縦に文字を読むとどうこう～とか入れようぜ！」

「……え？　あ、うん……がんばる！」

「もう、また適当な事言って」

　Ａ乃はそう言いながらも笑っていた。

「ポスターとかも作んなきゃいけないしな！　なんかこう、かっこ

いい感じのキャッチとか入れて作りたいな！」

「キャッチね、っていうかホントそういうの好きだよね」

「おう！　せっかくの機会だしな！　デザインとかはＢ香にがんばってもらうことになると思うけど、頼むな！」

「……うん！　が、がんばる……！」

　そうやって文化祭の準備期間はもう、いろいろとドタバタしておりあっという間に日にちがすぎてしまったという印象しかない。

　万全だと思っても次から次へといろいろなトラブルが発生し、それを解決しているうちに、どんどん日にちが少なくなっていったのである。

　しかしそんなトラブルがあっても、それすら楽しむ事が出来ていた気がする。

　それもこれも、みんなのおかげだと改めて感じるのだった。

「よっし、後は明日……だな！」

「うん、長かったような、短かったような」

「あはは～でもちゃんと迎えられそうでよかったよ」

「まだ最終版はみなさん見てないですもんね？　楽しみにしていてくださいね？」

「……あれ？　Ｂ香ビーカどうした……？」

「……あ、ううん……た、楽しかったから……もう終わっちゃうのかあ……って、思うと……なんか……」

　Ｂ香の顔を見て、みんなも少しだけ寂しげな顔になる。

　でもオレは、いつもよりも、さらに元気にこう言った。

「なに言ってんだよ！　これからが本番だろ！」

──そして、ついに本番の日がやってきた。

終末ーＲｅ：ｗｒｉｔｅ□II　□壊れかけのファンタジーー

　木造二階建ての校舎。

　その二階部分にある音楽室のプレートの下には、映画研究会のポスターが貼はられていた。

　ポスターにはデカデカとした文字でこう書かれている。

　──『この本』は、決して手にしてはいけない。

　みんなで考えた、この映画のキャッチコピーだ。

　もちろん『終焉オワリノ本ホン』、そしてそれを暗示する『終焉シユウエンノ栞シオリ』をイメージしている。

　これは、実話を元にしたストーリーで、それの再現映像なんだというような噂うわさを文化祭前に「誰にも内緒だぞ？」という前口上つきで軽く流したところ、文化祭前という非日常感も手伝ってか、それが「まことしやかなもの」なのではないかという感じで、かなりのスピードで拡散していった。

　最終的には、「結局どっちなの？　本当なの？」とクラスメイトに聞かれたりもした。

　その度オレはしたり顔で、「その答えは、映画の中にあるさ……」とか言ってカッコつけるのだった。

　結局、すべての噂話なんて、嘘うそを本当に変える幻想に過ぎないのかもしれない。

　この世の中で真実と嘘なんてものが誰にわかるだろうか？

あるのは、「真実っぽい」ものと、「嘘っぽい」ものだけなのだ。

　噂話は、その境界線上をゆらゆらと揺蕩たゆたう。

　だから人は噂が好きだ。そして、だからオレも噂が好きなのかもしれない……映画の中のモノローグ通りだが、確かにそう思うのだった。

　まあそれはともかくとして、オレは廊下で、そのポスターの下で、アンケートを配りつつ、呼び込みをしていた。

「映画研究会です！　自主制作映画の上映会、もう間もなくでーす！」

　一人、また一人と足を止めて教室の中に入ってくれる。

　文化祭は始まったばかりだが、廊下を通る人も「あ、これ知ってる？」なんて感じで指を差してくる。

　教室の中にももうすでに結構な人が入っているようで、すでに出し物としては成功だということを確信するのだった。

　あとは、お客さんの反応だな……でも大丈夫！　あんなに頑張ったんだ……！

　無意味に自信過剰なオレだが、さすがに今回は初めての事で不安だった。

　でも、信頼できるみんながいるので、大丈夫だと、そう思えた。

教室の中ではＢ香ビーカが席への誘導を行っていた。

「……どうぞ、こちらの席が空いていますので……あ……！」

　ちらりと覗のぞいてみると、何もないところでズッコケそうになっていた。

　ドジッ子か！

『えー、マイクテスマイクテス。今日は我々映画研究会の自主制作映画、「終焉シユウエンノ栞シオリ」に足をお運びいただいて、まことにありがとうございます。この教室内におきましては……』

　Ａ乃エーノがマイクをつかってアナウンスをしている。

　席を詰めて座ってください、であったり、上映中の注意事項だったり。

　また、飲み物やポップコーンの販売についても紹介されていた。

　映画を見ながらといえば、コーラとポップコーン！

　これだけはぜひ！　と思い提案したのだが、Ｄ介デイースケがお菓子のことなら任せてくれといろいろと手配してくれた。

　教室の後ろ奥にスペースを設けてＤ介が販売をしてくれている。

　きっとかなりてんてこ舞いになっているに違いないと思い、そちらを見ると、Ｄ介が販売物であるポップコーンを食べながら接客をしていた。

「おいしい……ポップコーン……いかがですか……（ポリポリ）」

食べながらかよ！　なんてツッコミを遠距離からしつつも、それが結構美お味いしそうに見えたのか、次々と売れて行くのだった。

　意外な商才を持ってるのかもな……あなどれないぜ……Ｄ介ディースケ。

　Ｃ奈シーナは最後の最後まで入念な機材関係のチェックをしてくれている。

『……──また、アンケートもございますので、そちらもぜひご記入いただいて、可能でしたら椅子の上に置いていって頂けますと幸いです。それでは、もう間もなくの上映となります。みなさまぜひ、お楽しみくださいませ』

　Ａ乃エーノがアナウンスを終了させる。

　もうすぐだ。

「えー、これより映画研究会の上映がはじまりまーす！」

　オレは廊下で、最後に大きくそう言うと駆け込みのお客さんを受け入れてから、ドアを閉めた。

　教室のカーテンは遮光カーテンにし、他にも光が入りそうなところは段ボールや布で塞ふさがれている。

　オレがドアを閉めたのを見て、Ｃ奈が教室の電気を消した。

　オレ達たち５人は教室後方のプロジェクター周辺、機材スペースへと集まってきていた。

一つだけ約束をしていたのである。

一番最初の、再生開始ボタンは、みんなで押そうなって。

「……いよいよだな」

「……うん」

「楽しみ～」

「……き、緊張も……するけど……」

「……ふふ、みなさん準備はいいですか？」

５人でアイコンタクトをかわし、微笑ほほえみ合う。

「それじゃいくぞ……？　せーの……！」

＊

「おーう、おつかれ」

　後夜祭になると、顧問の先生が教室を覗のぞきに来てくれた。先生は今日第１回目の上映にも来てくれていたが、最後にも様子を見に来てくれたらしい。

「よかったぞ」

　先生はぶっきらぼうに一言だけそう言った。

　結論から言うと、オレ達たちの映画上映会は、大成功だった。

　第１回目の上映から盛況で、さらに、それを見たお客さんが「面白かった」と口コミで伝えてくれて、第２回第３回とどんどんと人が増えていった。

　先ほどの最終回上映では、立ち見も出たほどだった。

　オレ達は今、疲れ果てて片付けもせず、呆ぼう然ぜんとしていた。

　疲労感はある。でも、それよりも満足感の方が勝っていて。なんだかよくわからない興奮状態にあった。

「……ったく、さっき吹奏楽部の先生には言って、片付けについては明日でもいいって言ってもらえたらから、最後にお前らだけで上映会でもやったらどうだ？」

「……え？　マジですか!?」

　そう言えば結局忙しくてちゃんとゆっくり映画を見られていない事を思い出した。

先生のその提案は、本当に嬉うれしい。

「先生、ありがとうございます……！」

「おう、あ、あと集合写真も撮ってやるよ。５人一緒のがいいだろ？」

「ぜひ！　ありがとうございます！」

　なにからなにまで出来る先生だった。

　今回の事で評価が一番あがったのは、この人かもしれない。

「よーしいいか？」

　オレ達たち５人は黒板の前に立ち、写真を撮る。

　本当に、大げさでもなんでもなく、これまでの一生で一番思い出に残る一日だった。

　写真を撮影し終えた先生は、じゃあなと言って去って行った。

　窓の外を見ると、後夜祭のキャンプファイヤーが影をゆらゆらと揺らしていた。

　火の周りにあつまる生徒達がシルエットのように見える。

　オレはその光を眺めていると、あの日の、忘れてしまったはずの夢を思い出していた。

＊

　最初は手首が落ちていた。

断片はグロテスクで真っ赤に滴したたっていたのだが、血が抜けているからなのか指先に向けて陶とう磁じのように青白かった。

　そのせいか、オレはなぜかオモチャのようだと感じ、次に手袋のようだと感じた。

　我ながら間抜けな感想だとは思うが、本当にそう感じたのだから仕方がない。

　そして、非現実的な断片はさらに加速する。

　次に目に飛び込んで来たのは、人間の下半身のバラバラな死体。

　足から膝ひざまでと、膝から太ももの付け根まで。

　片足づつを２つに解体したもの。

　足から膝までは見てすぐに足だと分かったのだが、太ももの部分についてはそれのみを切り出すと、一瞬それが何なのか理解することが出来なかった。

　両方の足はご丁寧に制服のズボンや靴を履いたまま、バラバラにされていた。

「Ｂ香ビーカ……？」

　アレが知り合いの一部なのではないかという想像をする。

　友人が、ただの肉塊になって、目の前に転がっている。

　オレはすぐに正気を取り戻したように、その思考を振り払おうとする。

「違う……！　そんな……わけっ……！」

　しかし、次にオレの目に映ったのは、こんな絶望的状況でのポジティヴシンキングの余地すら無い、絶対的な状況。

Ｄ介デイースケの頭部のみが置いてある。

「……！」

　前髪で隠れた目、無意味に半開きの口元。

　まるで誰かが昼休みに使かってそのまま置きっぱなしになったサッカーボールのように、学校という日常に違和感がないように置かれているのが、より非日常感を際立たせる。

　２年前に世間を騒がせた事件では、たしか頭部は正門前に置かれていたのだったっけ。

　それを最初に見つけた人も、たぶん彫刻か何か、とにかく現実を理解出来なかっただろうなということを思う。

　再びフラッシュバックのように記憶は断片化する。

　次に覚えているのは、Ｃ奈シーナの死体。

　今度は上半身のみだった。

　腰から上が綺き麗れいに切断され、肩は落ちて手はダラリと垂れ下がり、頭部は首が座っていない赤ん坊のように傾かしげ、その虚うつろな目がこちらを見ているのが印象的だった。

　Ｃ奈シーナは小柄な女の子だったが、こうして上半身だけを見てみると普段よりも余計に小柄に感じられた。

　オレの思考はこの時点でもう既におかしくなっていたのだと思う。

現実逃避なのかなんなのか、先ほどからどうでもいいような事が脳内に浮かんでは消える。

　そして今度は突然聴覚が戻ったのかのようにキーンという耳鳴りがした。

　もしかしたら静かすぎることで、逆にうるさく感じているのかもしれない。

　そして目に入るのは、おそらくＡ乃エーノの死体。

　おそらくというのは、彼女の首から上が消えていて判別がつかなくなっていたからだ。

　つい１～２時間前に会った時は、あんなにも快活で爽さわやかな笑顔を見せていた彼女。

　その表情を含めた頭部が無いだけで、こんなにも没個性的で、モブキャラクターの一人のように見えてしまうものなんだ。

　きっと、オレが解体されたとしても同じようになってしまうんだろう。

　極限の状態において思考は支し離り滅めつ裂れつで、理不尽なものになる。

　嘘うそだろう？　まるで笑い話だ。

　ホラー映画を作っていたオレたちが、ホラー映画みたいな夢に巻き込まれるなんてさ。

　でも夢の方が自主制作映画では決して作れないような、手の込んだグロテスクさで、演出まで凝こっていると来てる。

　これが笑い話じゃなくて一体なんだって言うんだ。

夕暮れの差し込む木造校舎。

茜あかね色いろの差し込む太陽が、世界を真っ赤に染め上げる。

それはまるで、赤信号のように。

それはまるで、流れる血のように。

それはまるで、それはまるで……。

オレはフラフラと歩きながら音楽室へと向かう。

特に目的があったわけではないが、帰き巣そう本能のように普段の集合場所へと歩く。

そこに集まるメンバーは、もう全員がバラバラになってしまっているのにだ。

普段と同じように教室のドアを開ける。

黒板には文化祭の時に書いたまま消し忘れていた、『終焉シユウエンノ栞シオリ』の文字。

この世の中の、ありとあらゆる都市伝説が現実の世界に出てきてしまう、最悪の禁忌。

まさか、まさかそんな……。

「あるわけない……」

こんな、作り物の物語。

すべては「作り物」で「まがい物」。

映画やテレビの中の出来事のように、シナリオ通りのフェイク。

机の上に手をついて、外を眺める。

静止したかのような世界は、さらに非現実感を高める。

先ほどまでに立て続けに見た衝撃的な映像は、もしかしたら白はく昼ちゅう夢むだったのかもしれない。

そんな希望的観測が、思考停止の狭間はざまに浮かぶ。

ただ映画を撮っていただけ。

Ｄ介ディースケから撮影し、その次の日にはＤ介が来なくなった。

そして翌日にはＣ奈シーナを撮影し、またその翌日にはＣ奈が来なくなった。

さすがにおかしいと思ったが、Ｂ香ビーカも消え、Ａ乃エーノも消え……次に目の前に現れたらあんな事になっていた。

何かがおかしい、何かが。

欠けたままの一つのピースが、どこにも見つからない感覚に似ている。

しかしほぼ停止状態の思考回路では考えが纏まとまるわけもなく、ただ濃い霧の中を歩いているような感覚に陥る。

そのうち次第に上も下も右も左も分からなくなり、歩いているのかすらも分からなくなるような、そんな感覚。

「…………」

　視点が定まらないまま宙を見ていた。

　そんな注意力散漫な状態だったからだろうか、オレは、後ろから近づく「それ」に、まったく気がつくことが出来なかった。

　──カタッ。

「……ッ！」

　ゴッ！

　物音に振り向いた瞬間、トラックに跳ねられたような衝撃を感じる。

　オレは近くの机にぶつかりながら倒れ込むと、夕ゆう陽ひで逆光になったそのシルエットから、予想もつかないようなセリフが聞こえてきた。

「××××××××××××」

＊

「……！」

「ん？　どうしたの？　Ｅ記イーキ？」

　オレは何故か、あの日に見た夢の事を思い出していた。あの時は思い出せなかったのに、今ははっきりと思い出せる。……ただ、最後の言葉だけは思い出せなかった。

「……いや、どうでもいいことなんだけど……」

「？」

「ちょうど、映画作ろうって言った日にさ、変な夢見てたんだ」

「変な夢？」

「うん、みんながバラバラになって………、よく分からないけど最後はオレもブラックアウトっていう感じの夢なんだけどさ」

「うーん、みんなが離ればなれになるのは嫌ねー」

「……でもあの日からさ、なんか、夢の中にいるみたいな気持ちだったなって」

「……確かにそうですね」

「……なんかさ、ホントありがとな」

　オレは一息つくと、感謝の気持ちを伝えた。

「最初は、正直こんな事になると思ってなかった……、ただ、面白そうだな、位だったんだけど……結果的に、オレ、言い出してよかったわ……」

やばい、ちょっと感動で泣いちゃいそう。

「……言い出した時は何言ってんだかって思ったけど、でもやってよかったよね」

　Ａ乃エーノも笑いながら賛同してくれる。

「みんなで一つのことやるのって、すっごい楽しいし、やっぱり青春って感じしちゃったな。青春っぽいことこれまでもしてきたつもりだったけど……正直今日に比べたら全然だったな……えへへ……」

「私も、改めて、Ｅ記イーキさんに感謝させてください」

　Ｃ奈シーナがこちらを向いて続ける。

「私、これまで、ただのオカルトが好きだっただけで……特にこれが誰かの役に立つとか、人に喜んでもらえるとか、そういうこと思ったこと無かったんですけど……、今回のおかげで、私……すっごい嬉うれしかったんです」

「……おう」

「だから改めて言いますね、Ｅ記さん、ありがとう」

　屈託のない、綺き麗れいな笑顔。

　やばい、ホントに綺麗だな、なんて思ってしまう。

「俺も～なんか、嬉しかったな」

　Ｄ介デイースケも続けてこちらを向く。

「正直に言うと、俺、いままでなにかに一生懸命になったことってなくて……なんか、なんて言ったらいいのかな～いろいろやる前から諦あきらめてた部分とかあると思うんだ～」

　普段とは少しだけ違う、少し落ち着いたトーン。

「映画とかも好きだけど、自分が何になりたいかとかもわかんなくて……でも、今回の事もあってすっごい撮影とか楽しかったし、将来、なんか映像とか関係の仕事に就くのもいいかななんて、そんな

こと思ったよ～」

「マジで!?」

「うん～進路決定みたいな感じ～あはは～」

　高校二年生。

　オレ達たちはこれからどうなっていくか、決まりそうで決まらない、そんな時期。

　なんか、友達がそうやって進路を漠然とでも決めたって言われると、焦ったりもするけど。そうだよな、なんか、これがきっかけでそういう人生の大事な決意が出来たって言われると、正直嬉うれしいかもしれない。

「だから、ありがとうね～」

「……おう！」

　前髪を少し分け、目をしっかりと合わせて握手をしてくるＤ介デイースケ。

　そしてＢ香ビーカの方を見る。

　Ｂ香はさっきからずっと下を向いていた。

「……う……ううぅ……」

　ボロボロと大粒の涙を流して泣いている。オレは笑顔を向けながら背中に手を置く。

「Ｂ香～泣くなよ～！」

「……だ、だって……も、もう……ほんとに……お、終わっちゃうって……思うと……」

　寂しい気持ちはオレも一緒だった。

　でも、祭りは祭り、しっかりと気持ちを切り替えないといけない。

「まだ、最後の上映が残ってるだろ？」

「……で、でもぉ……」

「ほら、劇場誘導はお前の仕事なんだから、頼むぜ？」

「……う、うん……」

　ようやく少しだけ笑顔を見せてくれる。

　感動屋さんなところも含めて、それがＢ香のいいところだと思う。

　　　＊

「……よしっ準備出来たな」

「うん！」

「ポップコーンもあるからね～」

「……えへへ……さっきは泣いちゃったけど、やっぱり……ワクワク……するね……」

「それでは、始めていいですか？」

「おう！」

　──こうしてオレ達たち、映画研究会、最期の上映が始まった。

コンテニューしますか？

ＹＥＳ／ＮＯ

映画は、正直大満足だった。

もちろん、お金が掛かってるわけじゃないから、照明とかだってしっかりとはしてないし、音声とかも聞きづらい部分もある。

カット割りだって、今考えるとこうすればよかったな！　なんて思ったりするところもあるし、クオリティの部分で言い出すとキリが無いほどダメだしは出来るだろう。

でも、自分たちで今できる、最大限以上の物が出来たという自信はあった。

エンドロールが流れる中、オレは本当に感動してしまって、思わず拍手をする。

自分たちで作った映画に対して拍手というのも、なんだか変な感じがしたが、それでもせずにはいられなかった。

「……ほんっとありがとな！」

自分一人ではここまで出来なかった。

みんながいるからこそ出来た映画だった。

何度感謝してもしきれない。

「いや～でもホントよかった、編集、カメラも超よかったよ！」

「みんなの演技が良かったからですよ」

「演技で言ったら、Ｃ奈シーナも凄すごかったじゃん！」

「いえ、Ａ乃エーノさんに比べたら全然ですよ」

「……ちょ！　て、照れるからやめ……！」

「ふふっ、Ｂ香ビーカちゃんの一人二役もとってもよかったですしね」

「……あ、う、うん……ごめ………」

　Ｂ香はエンドロールからまた泣き始めていた。

　オレ達たちが作ったのはホラー映画だってのに、確実に感動の涙だよなそれ！

「Ｂ香パートではカット割りもよかったよな！　Ｄ介デイースケと一緒に相談しながらやってさ」

「うん～結構違和感なく、本当に二人いるみたいな演出になったしね～」

　しばらくの間、あそこがよかったここがよかったなどの話をしていた。

　一つ一つのシーン、全すべてに思い出があって、語り尽くせないほどだった。

　しかし、そんな中で急に話は変な方向に向かうのだった。

「──……そう言えばさ、Ａ乃エーノの話のあのシーン、なんか人影？　みたいに見えたんだけ……なんか映ってなかった？」

「あ、それ私も思った！」

「おかしいですね。編集の時は無かったと思うんですが……」

「撮影後のチェックでも無かったと思うけどなぁ～」

「……な、なんだろう……ね？」

Ａ乃の家での撮影の際、ほとんど家を真っ暗にしているのだが、音声と、何か映像にノイズのようなものが入っていたシーンがあるような気がしたのだ。

　話してみるとみんなも同じように感じているようだった。あり得るはずのないものが映り込んでいる。一体なんだったのだろう？

　……もしかして、本当に霊的な何かだったり？

「あり得ません！　人影があったとしたら、編集の時にわかるはずです」

「えー、でもじゃあなんだろう？」

「超常現象以外あり得ないですよ！」

「いやでもなんかさ、たまたま何かが映り込んでて、それが人影っぽく見えちゃってて、Ｄ介デイースケもＣ奈シーナも見逃したかもしれないじゃん？」

「だから、それが無いって言ってるんです！」

　Ｃ奈が珍しく、爛らん々らんとした目つきで声を上げている。

　自分が編集をしているから自信があるのだろうということと、超常現象であって欲しいという両方の気持ちからだろう。

「なんか映り込んだり、人影に見えるものってあったかなあ……」

「無かったですよ、ねえ？　Ａ乃さん」

「……いやでも、証明することも出来ないし？」

「う～ん、なにか映り込んでるんだとしたら、ほぼ同条件にして撮影し直してみれば、わかりそうなもんだろうけど～」

一瞬の沈黙。

　みんなが思いついた事が一緒だと言うような感覚。

「……じゃあ、撮り直してみる？」

　オレはそう提案した。

　みんなはしばらくの間黙っていたが、最終的な結論としては一つだと言うことになったらしい、表情を明るくして一斉に笑い出すのだった。

「なんか、Ｃ奈シーナムキになってたのって、こう言わせたかったんじゃないの？」

「そんなことないですよ？　でも、結果的にはありだと思います」

「そだね～なんかいろいろと勉強にもなったし」

「…………え、え？」

　Ｂ香ビーカは一人まだ状況を理解出来ていないようだった。

「でも撮り直すって、まったく同じのを？」

「そうだなーちょこちょこは変えつつ、でも基本は一緒のを撮って、ついでに後半も撮っちゃうとかどう？」

「完全版という感じですかね？」

「前半がもしぐちゃぐちゃになったとしても、後半まとめればなんとかなると思うし」

「また、適当なこと言って！」

「でもほら、正式な部活なわけだし、継続的にやっていこうぜ？」

　Ａ乃エーノは笑いながらこちらを見る。

「まさに、コンテニューってことね」

「あはは～」

「……うん、もう一度やろう」

　ひとしきり話が盛り上がり、撮影をもう一度やると決まってから、オレは独り言のように呟つぶやいた。

　もう一度描き直そう。

　今度はもっと、うまくやれるはずだ。

　窓の外を見ると、後夜祭のキャンプファイヤーも終盤で、人も火もまばらになっていた。

　パチパチと火の粉が舞い上がり、空に向かってフワフワと浮く様は、まるで蛍の光のようだった。

　まるで夢のようなその景色は、同時にまた、悪夢のようでもあるのだった。

コンテニューしますか？

YES／NO

—ジャキ

—ジャキ

—ジャキ

誰もいなくなった後の校舎に、不吉な音が響き渡る。

その音は、音楽室の中から聞こえてくるようだった。

「……まさにコンテニューってわけね」

ハサミで台本を切り刻み、微笑ほほえんでいる。

「あ～でも、せっかくの台本だったのにな～」

時に手を休めつつ、スナック菓子を頬ほお張ばる。

「……で、でも……これは……しかたが……ないのでぇ……」

再び台本にハサミを入れながら弱々しく呟つぶやく。

「……ふふふ、なんだか映画の中にもこんなシーンがあったような気がします……」

広い部屋にたった独りで、呟き続けた。

「—よっし！　じゃあそろそろ、始めようかな！」

『アナタの熱い夢　いないいないばー（笑）』

あとがき

　初めまして！　から、「来年の夏もこうして二人きりで夏祭りに来るのが夢なんだ……今度は、絶対二人でお揃いの帯にするの。色は黄色！　柄は……うーん。紫陽花あじさいがいいなっ！　私達の想おもい出がいーっぱい詰まったお花だもんねっ！　あとはね、黄色の浴衣ゆかたに黄色の髪留め！　それで、それで……貴方あなたも私もずっと笑顔なんだ……。ねぇ。坂さか野の君……私……まだ、頑張れるかな？　また、夏の夜に浴衣着て……かき氷食べれるかな？」なんて色彩センスに欠ける方まで、おはようございます。こんにちは。こんばんは。どうも、スズムです。

　突然ですが僕は普段、極ごく々ごくありふれた会社でサラリーマンをやっております。

　その合間にこうして小説を書かせていただいているのですが、決算の関係もあり年末から年度末に掛けては会社員として毎年大忙しです。人間窮きゅう屈くつにバタバタすると良からぬ方向に気持ちが向いてしまったり、人当たりが強くなってしまいがちですよね。ただ僕の場合は変な癖である事は自覚しているのですが、忙しくなればなるほど妄想をしてしまいます。せっかくのスペースですし今回は最近した妄想、もとい、ちょっとした性癖を聞いてください。

『終焉シユウエンノ栞シオリ』シリーズでは、作詞・作話を担当させていただいておりますが、実は個人で曲を書いたりもしています。（アニメのＥＤを作らせてもらったこともあるんだよ！　にひひ！）

　僕の作風は、現実に近い何ど処こか不思議な世界に紛れ込んでしまった主人公を中心としたお話を一曲もしくは一話読み切りの物語にまとめるというものなのですが、実はその不思議な世界の元ネタのほとんどは、先程お話した「妄想」なのです。

　それ故にプロットを書く際テーマの欄は絶対に「もしも～」から始まります。

「もしもモテモテのアイドルになったら」「もしも学校の意味が無くなったら」「もしも世界の寿命が明日までだとしたら」「もしも自分の居なくなった後の世界を覗けたら」「もしも好きでもない人に惹かれてしまったら」などなど。

　厨ちゆう二に臭いですが妄想世界の扉は、特定条件など無くいきなり開きます。

　とある日、いそいそとニュースの音を聞きながら忙せわしなく晩ご飯を胃袋に突っ込んでいる途中、「学校の教員がイジメを訴える子供に対して〝協調性が無い〟等の発言を～」というキャスターさんの言葉が耳に飛び込んできたと思ったら、その子供の気持ちは？　生活態度は？　背景は？　どうして大人は助けてあげなかったの？　助けてあげられなかったの？　もしも、しっかりした子だとしたら尚更なんで？　その子の容姿は？　性別は？　周りの子達は？　なんて頭の中で色々な質問と世界の構築が始まって、溢れだし、固まります。固まった後は再現アニメーションの再生ボタンを押したかの様に映像が流れ出し、調子が良いと起承転結全て見る事ができます。途中で辻つじ褄つまが合わなかったり、冷めてしまうと脳内構成からやり直しです。

　終焉シユウエンを書いているときも登場人物達がいきなり会話をしだしたりと近い感覚はあるのですが、どうにも妄想とはスイッチが違うようでその時のメンタル等に左右されず助かっております。

　もちろん僕なんてまさに「ど」がつく程人間臭い人間ですので、先述の通りメンタルに左右されるなんてことも多いです。終電も無くなった時間に徒歩で会社から帰宅している時などは、心が疲れているからか無意味な虚きよ無む感かんに襲われます。（学生の方には、日も暮れそうな時間まで頼まれた教室の掃除をしていたのに、褒めてくれる人も気づいてくれる人も普段一緒に下校する友達もみんな帰ってしまってトボトボ独りきりで帰り道を歩いている自分を想像していただけたら何となく感覚は伝わるかもしれません）そんな荒んだ状態ですと、「こんな頑張っても報われない世界なんて崩壊すればいいのにな～」くらいのことを軽く考えています。すると、いつも通り誰が？　どこで？　どんな生い立ち？　崩壊ってどんな風に？　誰がトリガーなの？　周りの人間はどうするの？　もしも自分がこういう状況になったらどうする？　あの人ならどうする？　この人ならどうする？　と質問の大洪水、世界の構築が始まりますがフラットな状況とは違い、暗く寂しい結末になることがほとんどです。

まぁ、今の説明自体全て無意味な妄想なんですけどね。えへへ。

　そして、今更ながら『終焉シユウエン ノ栞シオリ参サン　終末シユウマツ-Re:write-』を手に取っていただきありがとうございます。十年前の五人の子供達は如何いかがでしたでしょうか？

　僕は、無印からの九人全員ドストライクなのでまさに目に入れても痛くないってやつです。もうみんな可愛かわいいみんな最高ぺろぺろ。（あ、編集さんここ消してください）

　さて、やっと尻尾を見せたキツネは今どこにいるのでしょうか？

　あ、そいつは臆病者なので、あまり物音は立てない方がいいですよ。せっかく見せた尻尾も千切り捨てて逃げてしまうかもしれませんので。

　それでは、『終焉シユウエン ノ栞シオリ詩シ　欠落ロスト-Re:code-』でお会いしましょう。

あとがき。

終焉ノ栞3巻発売ありがとうございます!!
いつも通りキャラデザ、表紙、口絵などやらせて
頂いています。
今回はA弥君達はおやすみで新しい子達を描かせて
頂いたので、なんだか新鮮でした。
個人的にはE記君がお気に入りです。

Sane

三巻ダヨー
あとがき
祝
発売おめでとうございます!
もう3巻らしくビックリですネ⊙▽⊙
10年前のキャラえげつなく描きずらいです
(E記くん10年前のキャラなのに誰よりもチャラいですよね)
今回から新キャラでてきましたが A子ちゃんとE記コンビ
好きです!でもやっぱりB子ちゃん好きです。
ツンデレかわいいいいい――――!!!
P.S
サーモンis Life
みね
ツンデレと制服は
すばらしい。

発売おめでとうございます!
衝撃展開に毎回ワクワクです!
新メンバーもとても好きです.
これからも応援しております!

終焉ノ栞
小説3巻発売
おめでとうございます!!
いつも楽しくそわそわしながら読ませて
頂いてます!!♡
A弥くんとD音ちゃんが個人的に
ドストライクでございます。二人に
蔑まれたいです。10年前メンバーだと
B香をペロペロしたいです!
続きもものすごく
楽しみにしてます!!!
A弥LOVE
市瀬雪乃

著者

スズム

　この間、晩ご飯は豪勢に牛丼だ！って意気揚々とコンビニに行ったら１５０Ｐさんがすごい勢いでアラビア語を店員さんに喋り散らすって夢を見ました。初夢ですね。

イラストレーター

さいね

　色彩豊かなデザインセンスを持ち、終焉ノ栞のキャラデザ等担当。

　本プロジェクトの一番のしっかり者である。お酒好き。

イラストレーター

こみね

　作画・動画制作等、「終焉ノ栞」のビジュアル周りを担当する絵師。

　「終焉ノ栞プロジェクト」の一番の理解者。こむねじゃないよ。

主犯

（１５０Ｐ）（わんはーふぴー）

أنا أبحث عن الحبيب.

الفتاة التي هي في هناك. أنا ليس الشخص

المشبوه. من فضلك قل لي رقم هاتفك المحمول.

آه آه آه آه آه، أأ آه آه آه آه! أأ آه آه آه آه.

カバー・口絵／さいね

カバー・本文イラスト／こみね

主犯／１５０Ｐ

装丁／團夢見